



国立大学法人

一橋大学

Hitotsubashi University

一橋大学大学院社会学研究科

ジェンダー社会科学研究センター  
活動報告書

(2007—2008年度)

2009年3月



## CGrass 活動報告書の発行に寄せて

2006年に発足したジェンダー社会科学研究センター (CGrass) は、試行錯誤しながらも、2年間の活動をくり広げてくることができました。この間、研究面では、先端課題研究7「日常実践／方法としてのジェンダー」を通じて、院生および教員の共同研究に取り組むとともに、6回の公開レクチャー・シリーズを企画・開催し、国内外の優れた研究者を招聘してきました。また教育面では、エントリー方式によって、ジェンダー教育プログラム (GenEP) を編成し、その運営を担ってきました。とりわけ2007年度から新設した「男女共同参画時代のキャリアデザイン」(共通科目)は、300名から400名が受講する人気授業として定着しつつあります。その他の科目においても、GenEPの学生アンケート調査によれば、おおむね好評であり、今後への学生・院生の期待が寄せられています。

学外の人々にも、GenEPを通じて、また公開レクチャー・シリーズなどを通して、私たちCGrassへの注目度は少しずつ増してきているように思われます。いろんな方が折りに触れ言及してくださっています。またジェンダー史学会の『ジェンダー史学』第4号(2008年)にも紹介文を掲載していただきましたし、東海ジェンダー研究所が10周年を記念して発刊する『ジェンダー平等の今—21世紀の課題(仮題)』にも、GenEPとCGrassの設立経緯と課題について書かせていただくことになっていきます。また「ジェンダーから世界を読む」という科目担当の方々が、『ジェンダーから世界を読むII』を明石書店から刊行されましたし、上記の「男女共同参画時代のキャリアデザイン」をベースとして編まれる本が、ほどなく刊行の予定となっています。先端研7の成果刊行も1年後をめざして、がんばっていきたいと思っています。

2年間の歩みを確認するために、これまでの活動記録を発行することにしました。今後とも、皆さんのお力添えを得て、充実したセンター活動を展開していきたいと思っています。2年間、CGrassの共同代表をつとめてこられた貴堂嘉之さんが、今年度をもって退任されますが、この場をお借りして、これまでの精力的なご尽力に心から感謝の意を表明したいと思います。また同様に2年間、アイディア力と実行力がかつちりとCGrassの活動を支えてくださったリサーチアシスタントの小野百合子さん、中村江里さんにも、心からお礼を言わせていただきたいと思います。

2009年3月

CGrass 代表

木本 喜美子



## ◆目次

CGrASS 活動報告書の発行に寄せて・・・	1
第一章 「ジェンダー教育プログラム」 (GenEP) 策定の経緯・・・	5
第二章 GenEP の特徴と CGrASS の位置づけ・・・	9
第三章 2007 年度：GenEP の概要・・・	13
一 2007 年度 GenEP 科目一覧・・・	15
二 2007 年度 GenEP 基幹科目シラバス・・・	17
第四章 2008 年度：GenEP の概要・・・	29
一 2008 年度 GenEP 科目一覧・・・	31
二 2008 年度 GenEP 基幹科目シラバス・・・	33
第五章 2007 年度 GenEP 受講者アンケートの分析・・・	39
一 単純回答の分析・・・	41
二 自由回答の分析・・・	50
三 2007/2008 年度「男女共同参画時代のキャリアデザイン」への学生の反応・・・	53
第六章 GenEP 科目担当教員の声・・・	59
第七章 ジェンダー社会科学研究センター (CGrASS) の活動・・・	67
一 先端課題研究 7 「日常実践/方法としてのジェンダー」・・・	69
二 公開レクチャー・シリーズ・・・	71
三 その他の講演会・・・	83
四 CGrASS 活動日誌 (2007-2008 年度)・・・	86



## 第一章

# 「一橋大学ジェンダー教育プログラム」 (GenEP) 策定の経緯





## 第一章 「一橋大学ジェンダー教育プログラム」 (GenEP) 策定の経緯

### ◆「一橋大学における男女共同参画社会実現に向けた全学的教育プログラム策定プロジェクト」 (GenEP) の発足

一橋大学社会学研究科を中心とする「一橋大学における男女共同参画社会実現に向けた全学的教育プログラムの策定プロジェクト」 (GenEP) は、2005年6月から約1年半にわたり、一橋大学における男女共同参画社会実現に向けた全学的教育プログラムの策定に取り組んできた。

この全学教育プログラムは、「市民の学である社会科学の総合大学」である一橋大学の学生が、男女共同参画社会実現のための担い手となって社会の発展に寄与していきよう、男女共同参画についての高い意識と理解を育むことを目的としていた。

同時に、学内での GenEP の取り組みと活動目標は、以下の3つの学外の動きを視野に入れたものでもあった。

1. 男女共同参画社会基本法の制定(1999年)
2. 国立大学協会による男女共同参画推進およびジェンダー学カリキュラム拡充の提言(国大協 2000年報告書『国立大学における男女共同参画を推進するために』)
3. 日本学術会議による大学におけるジェンダー学の確立・普及の提言(日本学術会議 2005年報告書『男女共同参画社会の実現に向けて—ジェンダー学の役割と重要性』)

GenEP の「男女共同参画社会実現に向けた全学的プログラムの策定」という目標は、男女共同参画社会基本法の精神に則り、国立大学協会や日本学術会議の呼びかけに積極的に応えるものであり、一橋大学が担うべき社会的責任に応えるものでもあった。本学において先陣を切って下から手を挙げたわれわれは、まず、教育プログラム策定の課題に着手した。

### ◆ 全学的教育プログラムの策定

GenEP は、全学的なジェンダー教育プログラムの構築にあたり、学生・院生、そして教員の声を取り上げるため、さまざまな手だてと機会を設け、調査とインタビューをくり返し行った。

カリキュラム構成のために、まず、「ジェンダー」や「男女共同参画」などの問題を取り上げている授業が全学的にどのようなに実施されているのか、また、これらの視点を採り入れた授業を今後どのように発展させていけるのかという基礎的データを収集するための調査を行った。2006年4～5月の教員調査の結果、多様な専門領域において、ジェンダー・イシューへの気づきを育て、学究的にそれを深めることを促すような授業が、さまざまな形態で取り組まれていることがわかった。と同時に、今後取り組みようとしている教員も少なからず存在しており、ジェンダーの視点にもとづくカリキュラムを組み立てていく基盤がすでに学内に蓄積されていることが裏づけられた。

こうしたジェンダー視角に立つ教員の研究の多様さ・教育活動への積極性に加え、もう一つの基盤となったのが、学生のなかでジェンダーに関わる学問的興味が高まっているという状況であった。このことは、学生の履修動向や学位論文のテーマから、さらには2006年度にGenEPが実施した学生調査の結果からも読み取れた。日常的な男女関係のあり方の模索、将来的な人生展望、そして何よりも、キャリアデザインをいかに描くのかという点においても、学生が男女共同参画への関心を有していることは明らかである。学生相談など学内の窓口で学生に接しているスタッフからも、学生が日常的に直面する困難、たとえばセクシュアル・ハラスメントなどに対する問題解決能力が求められていることが、つとに強調されている。さらに、前述した学生調査では、「労働とジェンダー」「経営とジェンダー」「グローバル化とジェンダー」といった、本学の学生ならではの特色あるジャンルへの要望が高く示された。

こうした基礎的データの収集や状況の把握に加え、さらに連続ワークショップや公開講座の開催を通して、学内の様々な要望を吸いあげ、取り組みを重ねていった。連続公開講座「男女共同参画のかたち」(2005年10月～2006年10月に計6回開催)では、学外から講師を迎えて男女共同参画について考える機会をもった。また、全学ワークショップ(2005年7月～2006年7月に計7回開催)を通じて、学内における情報共有、学生調査の結果分析などを行った。さらには、ジェンダー教育についての先駆的な取り組みを行っている国内外の機関の視察を積極的に行った。国内では、国際基督教大学ジェンダー研究センター、お茶の水女子大学ジェンダー研究センター、名古屋大学男女共同参画室、早稲田大学ジェンダー研究センター、海外では、台湾、韓国、フィリピン、香港、デンマーク、アメリカにおけるジェンダー教育の取り組みを学んできた。

こうした活動を積み重ねた上で、GenEPは、2006年10月に「全学シンポジウム—ジェンダー教育プログラム策定に向けて—」を開催した。記念講演に続くシンポジウム「ジェンダー教育プログラム構想の現状と課題」では、商学研究科、経済学研究科、法学研究科、社会学研究科、言語社会研究科の各研究科長(経済学研究科のみ研究課長代理)および副学長が登壇し、各研究科の状況や研究・教育活動の現状についてのデイスカッションが行われた。

そして、2年間にわたる活動の結果、GenEPは『全学的ジェンダー教育プログラムへの提言』を著わし、ジェンダー教育プログラムの提言を行ったのである。

## 第二章

### GenFP の特徴と CGraSS の位置づけ



## 第二章 GenEP の特徴と CGrASS の位置づけ

### ◆ 「一橋大学ジェンダー教育プログラム」(GenEP) の目指すもの

本教育プログラムは、学生のジェンダー理論の学習を支援し、履修者が男女共同参画社会の実現をめぐる問題に気づき、問題を解決するために必要な知識、能力、手法を身につけることを支援することを理念としている。そのため、学生の系統だった履修を促し、多様な学習形態を導入するなどの工夫を交え、教員と学生が新たな知の構築に挑戦することを励ますことを主眼としている。

この観点から、この教育プログラムには大きく二つの到達目標をおいた。

- (1) 学生がジェンダーや男女共同参画にかかわる基礎的知識を身につけ、その理論と方法を体系的に修得する。
- (2) さまざまな専門領域にジェンダーの視点を積極的に導入し、既存のデザインプリンとの総合をはかりつつ、市民社会を解明する社会科学におけるジェンダー視点のもつ意義を多面的に修得する。

以上の到達目標に向かって、それぞれ専門的知見を深め研究を進展させていくなかで、ジェンダー視点から既存の社会科学のデザインプリンに揺さぶりをかけ、新しい社会科学の地平を切り拓くことが期待される。

### ◆ 「一橋大学ジェンダー教育プログラム」(GenEP) の特徴

「一橋大学ジェンダー教育プログラム」の特徴は、次の3点にまとめられる。

1. 全学共通教育、学部教育から大学院修士・博士後期課程の教育にいたるまで、緩やかなスローペースに連なる、積み上げ型の体系的ジェンダー教育を目指す。  
具体的には、ジェンダーを授業の主軸とする基幹科目群と、ジェンダーが取り上げられる学際的な連携科目群の二つの科目群を相補的に履修することができる。基幹科目群では、導入的科目から発展的科目へと積み上げ式の履修で、ジェンダーや男女共同参画にかかわる基礎的素養を身につけることを第一の目標としている。発展レベルにおいては、さらに、独創的かつ先端的な研究の基礎となる理論や方法、当該研究分野に関する包括的な知見の修得を目指している。連携科目群では、基幹科目群、および全学的な教育活動と連携しながら、既存の社会科学・人文科学の枠組み、体系をジェンダーの視点から問い直ししていくことを目的としている。
2. 社会科学のなかにジェンダー視点を導入する基礎的・学際的教育の充実と先端的研究の創造を目指す。
3. 男女共同参画社会の実現に資する市民の育成をめざす基盤的教育を開発する。男女共同参画をキーワードとした大学と社会との有機的な連携を促進する。

◆ 「一橋大学ジェンダー社会科学研究センター」 (CGrASS) の設置

ジェンダー教育プログラム策定プロジェクトの提案を受け、2007年度より「一橋大学ジェンダー教育プログラム」が開始された。これに伴い、GenIEPの後継組織として、2007年4月より「一橋大学ジェンダー社会科学研究センター」(CGrASS)が設置された。市民社会の学である社会科学の総合大学として、社会科学諸分野での基礎研究、ならびに先端的研究を積み重ねてきた一橋大学の学問的伝統の上に、ジェンダー視点を導入した新しい先端的社会科学研究の潮流を生み出すという研究活動と、ジェンダー教育プログラムの運営という教育分野の二つの機能をもつセンターである。具体的には、センターは以下の3つの部門を有している。

＜研究部門＞

ジェンダー視点を導入することを通じて既存の社会科学諸分野のダイナミクスに揺さぶりをかけ、新たな方法的地平の開拓を目指す。

学際的な共同研究のテーマとしては、

- ①労働・家族を軸にしたジェンダー研究
  - ②人種、階級、エスニティなどの社会編成とジェンダーの複合的な社会構造分析
  - ③ジェンダー視点からの国際移動の総合研究
  - ④文化とジェンダー
  - ⑤アメリカ研究とジェンダー
  - ⑥スポーツとジェンダー
- などに力を入れて取り組み、成果は出版刊行し、広く社会に向けて発信する。

＜研究交流部門＞

国内外の先端的なジェンダー研究所や研究者とのネットワークの構築をはかり、シンポジウムやワークショップを開催し、教員・院生間の研究・教育面での相互交流を推奨・推進する。

＜GenIEP部門＞

「一橋大学ジェンダー教育プログラム」の運営を担う。

## 第三章

### 2007年度：GenEPの概要





### 第三章 2007年度：GenEPの概要

「一橋大学における男女共同参画社会実現に向けた全学的教育プログラムの策定」プロジェクトの活動を経て、2007年度より、GenEP「一橋大学ジェンダー教育プログラム」が始まった。初年度は、8つの基幹科目（学部：6科目／大学院：2科目）と、35の連携科目（学部：24科目／大学院：11科目）が開講され、約4,200名の学部生・大学院生が受講した。初年度のGenEPの概要は、以下のとおりである。

#### 一 2007年度 GenEP科目一覧

2007年度のGenEP科目は以下の一覧のとおりである。★、◎、○の各印は、講義においてジェンダー関連の問題を取り上げる目安を示している。★印は講義全体をジェンダーの視点から構成する講義、◎印はジェンダーを講義の一つの柱とする講義、○印はジェンダーについて1,2回取上げる講義である。また、※印は学部と大学院の共修科目であることを示している。

#### (1) 学部科目

##### <基幹科目>

共通	男女共同参画時代のキャリアデザイン	西山昭彦／オムニバス
共通	ジェンダーから世界を読む	中野知津／オムニバス
共通	ヒューマン・セクソロジー	村瀬幸浩
共通	ジェンダーと心理学	柘植道子
社・基礎	ジェンダーと社会	佐藤文香
社・発展	家族社会学	木本喜美子
社・発展 ※	労働とジェンダー	木本喜美子／オムニバス

##### <連携科目>

〔全学共通科目〕

○	地球社会研究	落合一泰・宮地尚子ほか
○	人類学	岡崎彰
◎	教育と経済 I	松塚ゆかり
○	まちづくり	林大樹・横田雅弘
○	各国文学論（アメリカ文学史）	越智博美
◎	教育と経済 II	松塚ゆかり
○	アメリカ研究入門 I	三浦玲一
○	各国文学論（イギリス文学原典講読） I	井川ちとせ
○	外国語上級 I	中井亜佐子

[各学部の科目]

○	商	消費文化論	越智博美
○	経	地域研究方法論	加藤博・佐藤宏
○	社	社会人類学総論	一意美保
○	社	ヨーロッパ社会史総論	阪西紀子
○	社※	社会文化論原典講読	井川ちとせ
○	社	社会学理論	多田治
○	社	教育研究法	木村元
○	社	宗教社会学 I	深澤英隆
◎	社	社会史史料講読Ⅲ	貴堂嘉之
○	社	社会心理学 I (社会的分野)	安川一
○	社	教育の歴史	関啓子
◎	社※	アメリカ社会史特論	貴堂嘉之
★	社※	社会調査特問	木本喜美子
○	社	教育社会学	中田康彦
○	社※	環境教育学	関啓子

(2) 大学院科目

< 基幹科目 >

社	社会学/地球市民とジェンダー	木本喜美子
社	社会科学のなかのジェンダー	貴堂嘉之/オムニバス

< 連携科目 >

○	商	人材マネジメント	守島基博
○	経	労働経済学 I	川口大司
○	経	地域研究概論	加藤博/佐藤宏
◎	社	アメリカ研究	貴堂嘉之
○	社	地球市民論	関啓子
◎	社	平和社会論	宮地尚子
★	社	先端課題研究7「日常実践/方法としてのジェンダー」	木本喜美子・貴堂嘉之
○	社	情報行動文化論	ジョナサン・ルイス
◎	社	地球社会情報論	多田治
○	社	文芸思想研究	井川ちとせ
◎	言	欧米言語文化論 (英語圏Ⅲ)	中井亜佐子

## 二 2007年度 GenEP 基幹科目シラバス

### (1) 学部における基幹科目

① ジェンダーから世界を読む / 中野 知津  
(2007年度冬学期、全学共通・総合・学際)

#### 【授業概要】

複数の言語文化圏において、さまざまな視点とテーマのもと「ジェンダーから社会を読む」試みを展開する。言葉・宗教・歴史・地理的環境・社会組成が種々に異なる現実を読み解くうえで、「ジェンダー」という視角あるいはフアクターを考慮に入れるとはどういうことなのか、多様な事例や理念・思想面の問題提起を踏まえながら検討していく。この学期の講義全体を通して、ジェンダーをめぐる異文化交流の輻輳をおおいに楽しんでいただきたい。

#### 【授業の目的・到達目標と方法】

多彩な専門領域における問題意識を投影することによって、ジェンダー視点そのものの理解を深めるとともにその展開の可能性を探る。

#### 【授業の内容・計画】

毎回新たなテーマのもとに授業が完結するオムニバス講義形式。

講義担当者および講義題目の予定は以下の通り：

10月 3日：オリエンテーション

10月10日 (第1回)：小関武史 (法学研究科)

「パックスに見る現代フランスのパートナーシップのあり方」

10月17日 (第2回)：越智博美 (商学研究科)

「マツチヨ・ヒーローの誕生：男性性の再編成と文学表象」

10月24日 (第3回)：中野知津 (社会学研究科)

「バル・エボックが恋した *mouméné* たち」

10月31日 (第4回)：藤野寛 (言語社会研究科)

「小倉千加子は何故、フェミニズムはやりそこなつたと言うのか——あるいは、フェミニズムのジェンダー論的転回について」

11月 7日 (第5回)：中井亜佐子 (言語社会研究科)

「英国移民文化におけるジェンダー・セクシュアリティ」

11月14日 (第6回)：吉野由利 (法学研究科)

「ジェンダーとナショナル・アイデンティティ：19世紀の英国におけるジェントルーマンとプロフェッショナル」

11月21日 (第7回)：南裕子 (経済学研究科)

「家族、地域社会における中国農村女性の現状」

11月28日 (第8回)：森本淳生 (言語社会研究科)

「アンブレ・ジツト『偽金つくり』とホモ・ソーシャル共同体」

12月 5日 (第9回)：三浦玲一 (言語社会研究科)

「ジェンダーの理論、アイデンティテイの理論」

12月12日 (第10回) : 柏崎順子 (法学研究科)

「江戸時代の女性観」

12月19日 (第11回) : 川本玲子 (商学研究科)

「イギリス女性作家による幽霊小説」

1月 9日 (第12回) : 清水朗 (法学研究科)

「現代ドイツ社会における女性像」

1月16日 (第13回) : 金井嘉彦 (法学研究科)

「ダイタニツク号の悲劇と女性」

1月23日 (第14回) : 井川ちとせ (社会学研究科)

「歴史分析のカテゴリリーとしてのジェンダー」

【テキスト・参考文献】

『ジェンダーから世界を読む』(明石書店 1996年)を参考にされたい。その他の文献・資料については、授業において随時指示する。

【他の授業科目との関連・教育課程の中での位置付け】

この科目はGenEP(一橋大学における男女共同参画社会の実現に向けての全学的教育プログラム)の「基幹科目群」の一つに位置づけられている。

② ヒューマン・セクソロジ / 村瀬 幸浩  
(2007年度夏学期、全学共通・運動文化・発展)

【授業概要】

性のあり様は人生の幸、不幸を左右するほどに重要な問題である。にも拘わらずこれを正面から学び考える機会が余りにも少ない。しかも興味本位で享乐的な情報は溢れんばかりである。そうした中でトラブルに巻き込まれるケースが増加している。

一方、時代は両性の平等、共生、性の多様性の承認など大いに変化してきている。こうした中で青年期の性的教養を深め、自立した人間関係のもとでの豊かな性と生のあり方を追求する。

【授業の目的・到達目標と方法】

男女共生時代とか、共同参画社会という言葉をよく耳にするようになった。両性の対等平等を基礎に互いの人権を尊重しつつ手を携えて生きる時代、社会をつくっていくということである。こうした考えを性(Sexuality)の分野にひき寄せてみると、例えばレイプ、セクシュアルハラスメントあるいは予期しない妊娠から中絶の問題など実にさまざまな課題が身近にあることがわかる。さらに性別に関してには性同一性障害やインターセクシュアル、あるいは性的指向の多様性など性についての考え方の根本的な問い直しが始まった。性と生をめぐる新たな時代の到来である。

本講義では青年期の性的教養として性の生理、エイズ・性感染症など性の病理を学び直すとともに上記の内容を組み込みながら「人権」として性を追求し考えてみたい。

到達目標としては、性の現実を目に向け、それを次の観点から読み取る力をつけてほしい。

- (1) 科学性・・・誤解、思い込み、先入観からぬけ出る
- (2) 関係性・・・性は相手のいのち、健康、人生をまきこむ
- (3) 多様性・・・性別、性的指向、生き方など決まりきっていない
- (4) 主体性・・・そして最終的には自分はどうするか

#### 【授業の内容・計画】

1. 本講義のすすめかたについてオリエンテーション。「性」の現実、誤解、偏見のいくつが。
2. 人工妊娠中絶の現実、背景について概説。そこから学ぶべき課題を明らかにする。各国の考え方、対応について理解する。
3. 中絶にいたる背景には両性の関係性や不確実な避妊がある。なぜそうなのかを追求するとともに具体的な避妊法を理解することの重要性に導く。
4. 女性が主体的に取り組める避妊法と、それに対する認識について問題点を明らかにする。
5. “赤ちゃん～この素晴らしきいのち～”視聴。産まれること、産むこと、さらに育てることについての認識を深める。
6. 「育てる」とはどういうことか。不妊の可能性も含めて、親子、とは何か自らの育ちを振り返りながら育てることの意味を考えていく。
7. 性別とは何によって決められるのか。性同一性障害について考えながら男と女何が違うか認識を深める。
8. 性的マイノリティとはなにか。同性愛者、障害者、高齢者などの性を学びつつ、リプロダクティブ・バイアスの根の深さを見つめる。
9. “人間にとつてセックスとは何か”“ひとはなぜ性に近づくのか”などセックスの本質、性的欲求の本質について考える。
10. 性暴力・レイプ、セクシャルハラスメントさらにデートDVなどーの現実を見つめなぜ多発するのか、どう対応すべきか、考えていく。
11. HIVをはじめとして性感染症が確実に増加しているにも拘わらず理解と対応は一向に進んでいない。このため深刻さの度合いは高まり続けている。この現実にはシッカリと向き合う。
12. 共生スタイルの多様化、シングル指向など新たな関係性の探究が始まり広がっている。いかなる選択をすべきか、「結婚」について考えることによって全体のまとめとする。

#### 【テキスト・参考文献】

- テキスト『セクソロジー・ノート』村瀬幸浩編著、十月舎（生協にて各自購入すること）  
参考文献『恋人とつくる明日』村瀬幸浩著、十月舎  
『男性解体新書』村瀬幸浩著、大修館書店

③ ジェンダーと心理学 / 柘植 道子  
(2007年度冬学期、全学共通・総合・人文思想)

【授業の目的】

心理学においてジェンダーがいかに扱われてきたのかを理解し、社会や日常におけるジェンダー観、また、自身がもっているジェンダー観に対する理解をも深めてください。このクラスを通じて事象や研究に対する批判的な目と建設的な思考を養うことを願います。

【対象者】

ジェンダーに関心のあるもの、内省をする意欲のあるものに受講してもらうことを望んでいます。心理学やジェンダー学の基礎が無くてもかまいません。ジェンダーと心理学の講義の中で、生物学的な性的問題、また、深刻な性暴力の問題などを取り上げるため性的な話を苦手とする学生の受講はお勧めしません。なお、今年度より受講生数を制限します。受講したい学生は、必ずガイダンスに参加してください。人数制限のため受講生の選考を行います。受講者数の制限・選考結果については10月7日の夜中12時までにWebClassに掲載いたします。

【受講生に求めるもの】

積極的な参加。授業内外の積極的な発言、質問を歓迎します。自身の行動や考えに対して客観的な目を持つように心がけるようにしてください。自分の体験を理解するために、既存の研究や理論を理解することが必要です。

【授業の進め方】

レクチャー：理論や概念、研究などを紹介します。

資料・文献：授業中に配布、もしくはWebClassに掲載します。

コメントシート：出席票をかねるコメントシートは各講義終了後に提出していただきます。講義に関する質問や意見を述べていただくものです。提出していただいたコメントは次の講義にて匿名で紹介する事があります。匿名でも紹介されたくない場合は、その旨をお知らせください。

【授業予定】

10/1	ガイダンス
10/8	心理学、性とジェンダー、ジェンダー・ステレオタイプ
10/15	ジェンダー役割とジェンダー役割態度
10/22	ジェンダー発達
10/29	ドメスティック・バイオレンス、セクシュアル・ハラスメント
11/5	ドメスティック・バイオレンス、セクシュアル・ハラスメント
11/12	性差研究、発達心理学とジェンダー
11/19	異文化心理学としてのジェンダー心理学
11/26	人間関係とメンタルヘルス
12/3	健康とジェンダー

12/10 Sexuality

12/17 Sexuality、アイデンティティモデル

1/14 精神疾患、フェミニスト・セラピー

1/21 予備日

#### 【参考文献】

- ・Anselimi, D. L., & Law, A. L. (1998). Questions of Gender: Perspectives and Paradoxes. McGraw-Hill Companies, Inc., Boston.
- ・Brannon, L. (2005). Gender Psychological Perspectives 4th Ed, Allyn and Bacon, Boston.
- ・Unger R.K. (2001). Handbook of the Psychology of Women and Gender. John Wiley & Sons, Inc. 森永康子、青野篤子、福富護（監訳）（2004）「女性とジェンダーの心理学ハンドブック」北大路書房
- ・青野篤子・赤澤潤子・松並知子（編）（2008）「ジェンダーの心理学ハンドブック」ナカニシヤ出版

④ ジェンダーと社会 / 佐藤 文香  
(2007年度夏学期、社会学部・基礎科目)

#### 【授業概要】

ジェンダー研究のパススペクティブを理解し、性にまつわる諸現象を脱自然化して考察する。

ジェンダーとはどのようなものの方に対抗するために生まれてきた概念であり、どのような理論的変遷をとってきたのかを理解し、家族、労働、性愛、暴力などの具体的な領域におけるジェンダー研究の知見を習得していく。

#### 【授業の目的・到達目標と方法】

20世紀後半に登場したジェンダー研究は、既存の学問の「人間」「市民」「国民」「労働者」像が実際には中立的概念ではないという認識のもとに、社会科学を中心に新たな知の構築に挑戦してきた。

この授業では、中性的な概念の中に性を読み込んでいくことを通じ、さまざまな社会現象の中に差異を見出していく。その差異は「男」と「女」のみならず、「正常な男女」と「それ以外の人々」の間に見出されるだろう。

また、ある差異を差別として問題化することを阻むような差異の自然化がどのように行われてきたのかを検証することも授業の重要な目的となる。ここでも「男」と「女」の差異のみならず、「正常な男や女」と「それ以外の人々」の差異がどのように意味づけられてきたのかを、あるときは歴史的な意味づけの変化として、あるときは文化的な相違として探究していくことになるだろう。

これらの作業を行う中で、ジェンダーとはどのようなものの方に対抗するために生まれてきた概念であり、どのような理論的変遷をとってきたのかを理解し、家族、労働、

性愛、暴力などの具体的な領域におけるジェンダー研究の知見を習得することが到達目標である。

授業は講義形式が中心であるが、随時VTRなどの映像資料を用いる。

#### 【授業の内容・計画】

初回にガイダンスを行い、以後、下記テーマに関して各2回の授業を行う。

1. ジェンダー研究のパススペクティブ—基礎概念の整理
2. 家族とジェンダー—「近代家族」
3. 労働とジェンダー—アソパイド・ワーク
4. 女性解放運動・男性解放運動の流れ
5. 性愛とジェンダー—近代のセクシュアリテイの装置
6. 暴力とジェンダー—性暴力

#### 【テキスト・参考文献】

テキスト：特定のものはない。必要に応じて適宜、資料を配布する。

参考文献：初学者向けの文献および資料として、下記のをあげておく。

- ・加藤秀一，2006，『知らないと恥ずかしいジェンダー入門』朝日新聞社
- ・加藤秀一・石田仁・海老原睦子，2005，『図解雑学 ジェンダー』ナツメ社。
- ・『AERA MOOK ジェンダーがわかる』，2002，朝日新聞社
- ・伊藤公雄・樹村みのり・國信潤子，2002，『女性学・男性学—ジェンダー論入門』有斐閣アルマ。

・セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク編著，2003，『セクシュアルマイノリティ—同性愛、性同一性障害、インターセックスの当事者が語る人間の多様な性』明石書店。

・犬伏由子・棕野美智子・村木厚子編，2000，『女性学キーナンバー』有斐閣。

・井上輝子・江原由美子編，2005，『女性のデータブック第四版』有斐閣

#### 【他の授業科目との関連・教育課程の中での位置付け】

本科目はGenEPプログラムの基幹科目群に位置付けられています。

<http://gender.soc.hit-u.ac.jp/genep.html>

#### 【受講生に対するメッセージ】

性にまつわる諸現象は身近な話題であるが、人の感情を時に激しく動かすことがある。履修者には、自らの感情の動きをモニタリングしつつ、既存の常識を疑ってみる柔軟な姿勢をもって授業に臨むことを希望する。

⑤ 家族社会学 / 木本 喜美子  
(2007年度夏学期、社会学部・発展科目)

#### 【授業概要】

現代家族がかかえる問題を明らかにするためには、家族の歴史変動過程を把握し、現地点を明らかにする必要がある。何ごとによらず「ものすべてに始まりがあれば終わりがある／私たちはいつたいたいのあたり？」(茨木のり子詩集「問い」の一節より)と問うことから始めることは、もともとオーソドックスなアプローチである。とりわけ家族



を研究対象としてとりあげるうえで、このアプローチを欠かすことができない。なぜなら家族という存在はだれにとっても身近な存在であり、あまりに自明な存在と信じられてきたために、「始まり」と「終わり」に思いをめぐらせる習慣に乏しかったからである。この講義では、家族の歴史的変動過程を重視し、その把握と解析方法をめぐって理論的立場を異にする見解に検討を加えていく。なかでもとりわけ、近年、活発な理論活動を展開しているジェンダー・アプローチの検討がひとつの焦点となる。

#### 【授業の目的・到達目標と方法】

多様な家族社会学に関する理論的立場をとりあげ、講義を解説していく中から、家族の社会的分析方法の習得を目標とする。家族社会学の研究史をふまえた基礎用語を修得し、家族変動をふまえた現代家族の問題をとらえるとともに、これについて分析のメスを入れることができる力量の獲得を目指す。

既存の研究の展開過程を体系的に学ぶために講義形式をとる。受講生の関心をとらえながら講義内容を微調整するために講義への感想文の提出を求める。また考えるべき主題をめぐっての課題提出を求める。そこに書かれた感想や指摘を共有し、また出された質問に応えることを通じて、受講生とのコミュニケーションをはかることにしたい。

#### 【授業の内容・計画】

テーマは「家族変動とジェンダー」とする。

- (1) 現代日本における家族／／何が問題か
  - (1-1) 家族変動の基本方向
  - (1-2) 「社会問題の家族化」の時代
  - (1-3) 先進諸国における「家族の危機」と日本
- (2) 家族研究の歴史
  - (2-1) 家族をめぐる論争の始まり・その時代
  - (2-2) 家族発展史の解釈 (2-3) 女性解放の展望
- (3) 近代家父長制と家族
  - (3-1) 近代社会と性別分業論
  - (3-2) 市民革命の原理とその限界
  - (3-3) 近代家族論
  - (3-4) 資本主義社会における家族
- (4) 現代日本の家族とジェンダー
  - (4-1) 企業社会とジェンダーの配置構造
  - (4-2) 企業社会と家族

#### 【テキスト・参考文献】

テキストは用いない。講義で取り上げるテーマごとに参考文献を紹介する予定である。受講にあたっては次の文献を参考文献とする。図書館で借りることができる。

木本喜美子『家族・ジェンダー・企業社会・ジェンダー・アプローチの模索-』ミネルヴァ書房、1995年。

アンソニー・ギデンズ『親密性の変容-近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム-』(松尾精文他訳) 而立書房、1995年。

【他の授業科目との関連・教育課程の中での位置付け】

社会学に関係する科目のうち、特に＜構造と問題＞にかかわる領域の科目を修得しておくのが望ましい。また「ジェンダーと社会」の習得者は、ジェンダー視点の発展として位置づけることができる。

【受講生に対するメッセージ】  
講義の展開とともに自分自身の家族観を再構成する作業に取り組んでほしい。

⑥ 労働とジェンダー / 木本 喜美子  
(2007年度冬学期、社会学部・発展科目)

【授業概要】

本授業は、労働の現実的な変動諸過程に対する幅広い専門的知識の獲得の場を提供しようとするものである。そのためにオムニバス形式によって、現実の労働場面において生起している諸問題（転換期における企業社会の編成、若者就労問題、過労死問題、差別・人権問題を、さらにはグローバルゼーション、ワークライフバランス、オールドタイプな働き方、企業の社会的責任など）をジェンダーの視点からとりあげる。全体を通じて、労働を中心とした社会変動の現実的諸過程に対する専門的で多面的な認識・分析力、さらには男女共同参画の視点、ジェンダーの視点に対する深い関心と理解とを兼ね備え高度専門的職業人としての力量の涵養をめざす。

【授業の目的・到達目標と方法】

労働を中心とする社会変動過程に対する認識・分析力および男女共同参画に対する専門的理解を育むことは高度専門的職業人として不可欠の力量となる。そのような力量を育むために、社会学研究科の教員を中心とし、商学研究科、法学研究科等の教員、さらには学外の実務専門家の協力を得ながらオムニバス形式で、多面的な知見の獲得をねらっている。

【他の授業科目との関連・教育課程の中での位置付け】

「男女共同参画時代のキャリアデザイン」（全学共通教育科目）をより深めるために設定されている。

【授業の内容・計画】

- 毎回読み切りのオムニバス形式をとり、次の三種類の領域と視角から構成される。
- 1) 企業社会のジェンダー的編成、若者就労問題、過労死問題、差別と人権などの問題群
  - 2) 労働市場、労働組織、労働組合とジェンダー構造
  - 3) グローバリゼーション、ワーク・ライフ・バランス、男女共同参画のトレンドと諸課題

＜2007年度講義内容＞

- 10月 5日 0.ガイダンス (木本喜美子：社)  
10月12日 1. 日本の企業社会とジェンダー (木本喜美子：社)  
10月19日 2. 若者の教育・就労問題とジェンダー (久富善之：社)

- 10月26日 3. 労働市場とジェンダー (高田一夫：社)
- 11月 9日 4. グローバリゼーションと労働の変容 (伊豫谷登士翁：社)
- 11月16日 5. ヒューマン・リソース・マネジメントとジェンダー (守島基博：商)
- 11月30日 6. 過労死・過労自殺とジェンダー (加藤哲郎：社)
- 12月 7日 7. ワーク・ライフ・バランスの視角 (守島基博：商)
- 12月14日 8. 労働組合とジェンダー (片岡千鶴子：連合)
- 12月21日 9. 差別・人権と法 (阪口正二郎：法)
- 1月11日 10. コミュニティビジネスとジェンダー(林大樹：社)
- 1月25日 11. 企業の社会的責任と男女共同参画 (谷本寛治：商)

## (2) 大学院における基幹科目

### ① 社会科学のなかのジェンダー / コーディネーター：貴堂 嘉之、佐藤 文香 (2007 年度夏学期、社会学研究科)

#### 【 講義題目 】

社会科学/人文科学とジェンダー研究の融合

#### 【 授業概要 】

この授業は、社会学研究科の教員を中心としたオムニバス形式の 13 回の講義から構成される。それぞれの担当教員の専門とする社会科学/人文科学の諸分野のデザインプリンとジェンダー研究との研究視座の接点を中心に解説を加え、両者を融合させた学際的な方法論、研究テーマの可能性を探るものである。

#### 【 授業の内容・計画 】

第 1 回 オリエンテーション

第 2 回 貴堂：社会科学の課題とジェンダーという視座①

\* 「学問的問い」をたてる前に

\* 近代の秩序とは ー権力、暴力、差別ー

\* 近代社会科学、人文科学の成り立ち

\* 研究のポジョナリティ

第 3 回 貴堂：社会科学の課題とジェンダーという視座②

\* 帝国のなかの人種・エスニテイ・セックス

\* 身体管理の技法ー生殖・人工管理・優生学ー

\* 異人種間結婚の研究の意味（「国民」の境界、共時的近代の見直し）

\* 優生学の世界史

第 4 回 佐藤：ジェンダー研究の歩み

\* ジェンダー研究の成立過程ーウーマンリテラからジェンダー研究へ

\* ジェンダー研究におけるジェンダー概念

ーセックス一元論・セックス/ジェンダー二元論・ジェンダー一元論

\* ジェンダー研究の対象とアプローチ 相対化と可視化という二つの方向性

\* ジェンダー研究の対象とアプローチ 二つの方向性

- \* ジェンダー研究の課題
- 第 5 回 木本：労働調査とジェンダー—小売業の労働組織分析を中心に
  - \* 労働調査へのジェンダー視角の導入
  - \* 職務分離を手がかりとした調査研究
  - \* 労働組織分析
  - \* 労働組織の変容過程分析
  - \* まとめと今後の課題
- 第 6 回 伊豫谷：ジェンダーのグローバル化—ゼンダ分析—グローバル資本の性別分業
  - \* ジェンダーという課題のグローバル化—ゼンダ分析
  - \* 資本主義と性別分業
  - \* 新国際分業 (NIDL) と女性
  - \* 経済のグローバル化とジェンダー—NIDL からポスト NIDL へ
- 第 7 回 岡崎：人類学とジェンダー
  - \* 大学の中で語ること
  - \* ジェンダーの普遍性と個別性
  - \* 人類学におけるジェンダー研究の歴史
  - \* フェミニスト・エスノグラフィ
- 第 8 回 伊藤：国際社会学とジェンダー①
  - \* 国際社会学という分野、方法
  - \* ジェンダー研究という分野、方法
  - \* 国際社会学とジェンダー研究の双方向的な知の組み替え
  - \* 事例 1 国際移民のジェンダー分析と隣接的問題群
  - \* 事例 2 モダンガール研究—国分析から抜け出るジェンダー研究
- 第 9 回 小井土：国際社会学とジェンダー②
  - ジェンダーとトランスナショナルな北米社会空間の構造
  - \* グローバルな分業の中での女性労働者—今日における周辺の労働とは何か？
  - 新国際分業論に基づく研究と女性労働者
  - 多様な周辺の労働—その見えざる共通項
  - \* 生産と再生産のトランスナショナルな編成構造
  - ジェンダーを規定するものとしての国境
  - 生産と再生産の重層的分離構造
  - \* まとめ
- 周辺の労働の多様な形態と曖昧化・不可視かを超えて  
社会的排除の一般理論のなかへのジェンダー論の埋め込み
- 第 10 回 井川：文学批評とジェンダー—テクスタカ作品か
  - \* 「テクスタ」という外来語の持つ力
  - \* author/authority、有機的統一体としての「作品」
  - \* ロラン・バルト “The Death of the Author”
  - \* ミシェル・フーコー “What is an Author”
  - \* ケイト・ミレット *Sexual Politics*

\*イヴ・コゾフスキー・セジウイック *Between Men, Epistemology of the Closet*

\*ジョーン・W・スコット *Gender and Politics of History*

第 11 回 多田：社会学・文化研究・沖縄研究とジェンダー

\*カルチュラル・スタディーズとは

カルチュラル・スタディーズの中のジェンダー

カルチュラル・スタディーズの制度化の問題

\*沖縄観光と沖縄イメージの系譜

なぜ観光とイメージなのか—方法としてのツーリスト

戦前の沖縄観光

「琉球の女」—沖縄イメージとジェンダー

\*表象と現実の関係を問う

第 12 回 柘植：ジェンダーと心理学

\*心理学研究におけるジェンダーバイヤス

\*心理学とは

基礎心理学と応用心理学

カウンセリング心理学

カール・ロジャーズの人間観

\*ジェンダー・ステレオタイプ

信念や態度が与える影響

ジェンダーアイデンティティモデル

\*心理学のこれからの課題

第 13 回 総括討論

——社会科学にジェンダーの視座をもちこむとはどのようなことなのか



## 第四章

### 2008年度：GenEPの概要





## 第四章 2008年度：GenEPの概要

GenEPの2年目にあたる2008年度には、10の基幹科目（学部：7科目／大学院：3科目）と、52の連携科目（学部：33科目／大学院：19科目）が開講され、学部生だけでも4,000名以上が受講した。2008年度のGenEPの概要は、以下のとおりである。

### ー 2008年度 GenEP科目一覧

#### (1) 学部科目

##### <基幹科目>

共通	男女共同参画時代のキャリアデザイン	西山昭彦／オムニバス
共通	ヒューマン・セクソロジー	村瀬幸浩
共通	ジェンダーと心理学	柘植道子
社・基礎	ジェンダーと社会	佐藤文香
社・発展	家族社会学	木本喜美子
社・発展 ※	労働とジェンダー	木本喜美子／オムニバス
社・発展	ジェンダー論	佐藤文香

##### <連携科目>

[全学共通科目]

◎	地域文化論（イギリス）Ⅱ	中井亜佐子
◎	教養ゼミ	三浦玲一
○	まちづくり（2008夏・冬）	林大樹ほか
○	Intro to Counseling Psychology	柘植道子
◎	教育と経済Ⅰ	松塚ゆかり
○	教育と社会	関啓子
◎	教育と経済Ⅱ	松塚ゆかり
◎	教養ゼミ	坂なつこ

[各学部の科目]

○	商（発）	企業社会論	谷本寛治
○	経（発）	労働経済学	川口大司
★	社（導）	社会研究入門ゼミ	佐藤文香
○	社（導）	社会研究入門ゼミ	森村敏巳
○	社（導）	社会研究入門ゼミ	中野聡
○	社（導）	社会研究入門ゼミ（オムニバス）	宮地尚子ほか

◎	社 (基)	国際社会学 I	伊藤るり
◎	社 (基)	社会・人文の日本語 I	河野理恵
◎	社 (基)	アメリカ社会史総論	貴堂嘉之
○	社 (基)	社会学理論	多田治
○	社 (基)	市民社会論	高田一夫
○	社 (基)	人間環境論	林大樹
○	社 (基)	社会人類学総論	石井美保
○	社 (基)	スポーツ社会学の基礎	坂なつこ
○	社 (基)	現代労働組合論 II	浅見靖仁
○	社 (発) ※	社会人類学特論	岡崎彰
◎	社 (発) ※	ヨーロッパ思想史特論	佐藤和哉
★	社 (発)	アジアの社会と文化	洪 郁如
◎	社 (発) ※	アジア思想史特論	坂元ひろ子
○	社 (発)	国際社会と文化	定松文
○	社 (発) ※	アメリカ社会史特論	中野聡
★	社 (発) ※	社会調査特問	木本喜美子
○	社 (発)	福祉社会論	高田一夫
○	社 (発)	コミュニケーション政策論	林大樹
○	社 (発) ※	環境教育学	関啓子

## (2) 大学院科目

### < 基幹科目 >

先端課題研究 7 「日常実践/方法としてのジェンダー」	木本喜美子 / 貴堂嘉之
社会科学の中のジェンダー	貴堂嘉之・佐藤文香 / オムニバス
ジェンダー関係論	佐藤文香

### < 連携科目 >

★	法	Gender and International Relations	前田眞理子
○	社	民族誌論	石井美保
○	社	地球市民論	関啓子
○	社	文化と政策	足羽興志子
○	社	地球社会情報論 / 社会学	多田治
◎	社	文芸思想研究	井川ちとせ
○	社	地球社会と紛争	足羽興志子
○	社	アメリカ研究	中野聡
○	社	まちづくり・社会起業論	林大樹

○	社	社会政策史	高田一夫
◎	社	アメリカ研究	貴堂嘉之
◎	社	アジア社会史Ⅱ	坂本ひろ子
○	社	現代情報社会の理論	多田治
○	社	地球社会と生命	宮地尚子
○	社	社会科学研究の基礎Ⅴ	深澤英隆
★	社	社会学	木本喜美子
◎	言社	言語文化論系基礎講義	三浦玲一
◎	言社	欧米言語文化論(英語圏)Ⅲ	中井亜佐子

## 二 2008年度 GenEP 基幹科目シラバス

### (1) 学部における基幹科目

\*以下の4科目については、2007年度のシラバス参照。

- ① ヒューマン・セクソロジー / 村瀬 幸浩  
(2008年度夏学期、全学共通・運動文化・発展)
- ② ジェンダーと心理学 / 柘植 道子  
(2008年度冬学期、全学共通・総合・人文思想)
- ③ ジェンダーと社会 / 佐藤 文香  
(2008年度夏学期、社会学部・基礎科目)
- ④ 家族社会学 / 木本 喜美子  
(2008年度夏学期、社会学部・発展科目)

- ⑤ 労働とジェンダー / 木本 喜美子  
(2008年度冬学期、社会学部・発展科目)

※授業概要等は2007年度のシラバス参照。  
<2008年度講義内容>

- 10月 3日 0. ガイダンス (木本喜美子：社)
- 10月10日 1. 日本の企業社会とジェンダー (木本喜美子：社)
- 10月17日 2. 構造改革による日本社会とジェンダー (渡辺治：社)
- 10月24日 3. 若者の教育・就労問題とジェンダー (久富善之：社)
- 11月 7日 4. 過労死問題とジェンダー (川人博弁護士)
- 11月14日 5. ヒューマン・リソース・マネジメントとジェンダー (守高基博：商)
- 11月21日 6. 賃金決定メカニズムとジェンダー (川口大司：経)
- 11月28日 7. 労働組合とジェンダー (伊勢丹労組委員長・竹本秀俊)
- 12月 5日 8. 労働市場とジェンダー (高田一男：社)

- 12月12日 9. 「グローバルゼーションと労働の変容」(伊豫谷登士翁・社)  
12月19日 10. 差別・人権と法 (阪口正二郎：法)  
1月 9日 11. コミュニティビジネスとジェンダー (林大樹：社 )  
1月23日 12. 企業の社会的責任と男女共同参画 (谷本寛治：商)

⑥ ジェンダー論 / 佐藤 文香

(2008年度冬学期、社会・発展、大学院共修科目)

【 授業概要 】

現代社会におけるジェンダー関係を分析しつつ、その解体・再編を目指してきたフェミニズムには、具体的イシューをめぐって相互に対立しあういくつかの理論的立場が存在してきた。

本講義では、国内外で蓄積されてきたフェミニズムの争点をいくつかとりあげながら、その見解の不一致を理論的立場の相違として考察していく。

【 授業の目的・到達目標と方法 】

第二波フェミニズムから女性学・男性学の登場を経てジェンダー研究へといたる歴史的経緯をおさえた上で、ジェンダー理論としてのフェミニズムの多様性とアプローチの違いを理解する。これまで以上にフェミニストが積み上げてきた数々の論争の蓄積と具体的な研究成果に学ぶことで、各々の研究関心に即した事象を考察 できるようになることを目指す。

【 授業の内容・計画 】

初回到にガイダンスを行い、以後、下記テーマに関して各2回程度の授業を行う。

1. 第二波フェミニズムからジェンダー研究へ
2. ジェンダー理論としてのフェミニズム
3. 家族と就労、ケアへのアプローチ
4. 政治と国家、軍隊へのアプローチ
5. ホルノゲラフイと中絶、法へのアプローチ
6. フェミニズムと男性、ジェンダー研究へのアプローチ

【 テキスト・参考文献 】

特定のテキストは用いないが、全体を通した参考文献として以下のものを挙げておく。

- ・ Bryson, Valerie, 1999, *Feminist Debates: Issues of Theory and Political Practice*, Basingstoke: Macmillan Press. (=2004, 江原由美子監訳, 長谷部美佳・岩瀬民可子・小宮友根・中西泰子・久保田京訳『争点・フェミニズム』勁草書房.)
- ・ Connell, Raewyn, 2002, *Gender*, Cambridge: Polity. (=2008, 多賀太監訳『ジェンダー学の最前線』世界思想社.)
- ・ Connell, Robert W., 1987, *Gender and Power: Society, the Person and Sexual Politics*, Polity Press. (=1993, 森重雄・菊地栄治・加藤隆雄・越智康詞訳『ジェンダーと権力—セクシュアリティの社会学』三交社.)
- ・ Whitworth, Sandra, 1997, *Feminism and International Relations: Towards a*

Political Economy of Gender in Interstate and Non-Governmental Institutions,  
Houndmills: Macmillan. (=2000, 武者小路公秀他監訳『国際ジェンダー関係論—批  
判理論的政治経済学に向けて』藤原書店。)

【 他の授業科目との関連・教育課程の中での位置付け 】

本科目はGenEPプログラムの基幹科目群に位置付けられています。

<http://gender.soc.hit-u.ac.jp/genep.html>

【 受講生に対するメッセージ 】

本科目は大学院共修科目のため、学部生の受講には「ジェンダーと社会」を履修済みであることを要件とする。卒業研究でジェンダーに関する事象をとりあげる予定のものであることが望ましい。

(2) 大学院における基幹科目

① 社会科学のなかのジェンダー / コーディネーター：貴堂 嘉之、佐藤 文香  
(2008 年度夏学期、社会学研究科)

【 講義題目 】

社会科学/人文科学とジェンダー研究の融合

【 授業概要 】

この授業は、社会学研究科の教員を中心としたオムニバス形式の 13 回の講義から構成される。それぞれの担当教員の専門とする社会科学/人文科学の諸分野のダイナミックとジェンダー研究との研究視座の接点を中心に解説を加え、両者を融合させた学際的な方法論、研究テーマの可能性を探るものである。

【 授業の内容・計画 】

第1回 オリエンテーション

第2回 貴堂：社会科学の課題とジェンダー

\* 「学問的問い」をたてる前に

\* 近代の秩序とは 一権力、暴力、差別—

\* 近代社会科学、人文科学の成り立ち

\* 研究のボジショナリテイ

第3回 貴堂：人種研究とジェンダー・セクシュアリティアメリカ合衆国の歴史から

\* アメリカ史研究と社会史という枠組み (方法、史料論)

\* 人種研究とジェンダー研究の接点

\* 中国系移民研究

\* 異人種間結婚の研究の意味 (「国民」の境界、共時的近代の見直し)

\* 優生学の世界史

第4回 佐藤：ジェンダー研究の歩み

\* ジェンダー研究の成立過程—ウーマンリブからジェンダー研究へ

\* ジェンダー研究におけるジェンダー概念—セックス—元論・セックス/ジェンダー  
二元論・ジェンダー—元論

\* ジェンダー研究を分類してみる—存在と真理をめぐる観点から  
\* ジェンダー研究の対象とアプローチ 相対化と可視化という二つの方向性  
\* ジェンダー研究の課題

#### 第5回 佐藤：軍隊／戦争研究とジェンダー

\* 軍隊/戦争の社会科学的研究の流れ  
\* 日本における軍隊/戦争研究  
\* フエミニズムと国家  
\* 軍隊社会学の女性兵士研究を超えて  
\* 軍隊/戦争のジェンダー分析

#### 第6回 大杉：人類学とジェンダー

\* 人類学とジェンダー・スタディーズの「気まぜい」関係  
\* コンテキストのなかのジェンダー：トリニダードの混血論争と聖母崇拜

#### 第7回 関：教育・環境とジェンダー

\* 環境教育について  
\* 海外の環境教育 イギリスとロシア  
\* 環境教育研究 現状と課題  
\* エレン・スローと「エコロジー」

\* 批判的な環境運動と環境教育の新しい研究動向： ジェンダー、エスニテイ、開発

#### 第8回 猪飼：医療とジェンダー

\* 専門職としての医療  
\* 一般的用法としての「専門職」  
\* 専門職論 (profession theory) からのアプローチ  
\* E. フリードソンによる専門職の定式化

\* 看護職による模倣

\* 日本における正看護婦/准看護婦の形成

\* 看護職に関する検討すべき論点

#### 第9回 坂元：中国思想史とジェンダー

\* 中国思想・中国哲学—メジャーとしての儒教の規則  
\* 宋明清—風俗：貞節・節婦・烈婦、董養媳 纏足 (身体制約と女性文化)  
\* 中国革命と「女性解放」の中国ナショナル・ヒストリー  
\* 日本での中国思想史研究のジェンダー化における困難

#### 第10回 中井：文学批評とジェンダー

\* 文学研究は「社会」や「政治」の問題に対して何ができるか  
文学研究はすでに死んでいる？  
物語の「狭間」を読む  
\* ケース・スタディー—英国移民女性の文化闘争  
「原理主義化」する移民2世？  
多文化主義批判  
ムスリム女性の主体性？—「シヤビーナ・ベーズム事件」

#### 第11回 平子：哲学とジェンダー

\*ヘルタ・ナーグル＝ドツェカルの「フェミニズム哲学」ードイツ語圏のフェミニズム哲学ー

序文 「フェミニズム哲学」の概念をめぐる

第一章 性の人間学

第二章 芸術と女性的なもの

第三章 理性ー男性的含意を持つ概念

第四章 非本質主義的政治のために

第 12 回 洪：植民地研究とジェンダーー台湾を中心にー

\*日本の植民地研究/帝国史研究の諸問題

日本近現代史研究における「帝国」「日本帝国」の位置づけの曖昧さ

西洋中心の帝国研究、植民地研究

「日本植民地統治史ー日本帝国史研究」と旧植民地のナショナル・ヒストリーとの

対話不足

\*帝国日本とジェンダー

分析概念としてのジェンダー

「植民地の日本女性史」の記述

切り口としての「慰安婦問題」

\*植民地台湾とジェンダー

植民地社会におけるジェンダーと階層

台湾人女性にとつての「植民地」ーフラクションを通して

第 13 回 総括討論

ー社会科学にジェンダーの視座をもちこむとはどのようなことなのか

② ジェンダー関係論 / 佐藤 文香 (2008年度冬学期、社会学研究科)
--

【 授業概要 】

フェミニスト国際関係論の文献購読を行う。

授業は受講者発表とデインスカッションによる演習形式で行う。

【 授業の目的・到達目標と方法 】

フェミニスト国際関係論は、外交や軍事政策といった国際関係も、それを分析する学問も主たる担い手が男性であったこと、それにもかかわらず国際関係も国際関係論もジェンダー中立的だと見なされてきたことによって生じてきた問題を批判的に対象化しようとする学問である。

本授業では、フェミニスト国際関係論の第一世代の論客であるアン・テイクナーとシンシア・エンロー、フェミニスト国際関係論の方法論について論じたはじめての論集などのテキスト購読を通じて、この分野の知見を摂取しながら、その方法的課題について考察していく。

【 授業の内容・計画 】

テキスト

Tickner, J. Ann, 1992, *Gender in International Relations: Feminist Perspectives on Achieving Global Security*, New York: Columbia University Press. (=2005, 進藤久美子・進藤榮一訳『国際関係論とジェンダー—安全保障のフェミニズムの見方』岩波書店.)  
Enloe, Cynthia, 2007, *Globalization and Militarism: Feminists Make the Link*, Maryland: Rowman & Littlefield.

【他の授業科目との関連・教育課程の中での位置付け】

本科目はGenEPプログラムの基幹科目群に位置付けられています。

<http://gender.soc.hit-u.ac.jp/genep.html>



## 第五章

### 2007年度 GenEP 受講者アンケート の分析



## 第五章 2007年度 GenEP 受講者アンケートの分析

「一橋大学ジェンダー教育プログラム」の初年度である 2007 年度には、GenEP 科目受講者へのアンケートを行った。初年度の GenEP 科目は合計 43 科目で、回収したアンケートは 2,117 枚であった。「一橋大学ジェンダー教育プログラム」を今後いつそう発展させていくために、以下ではその分析を行い、本学学生が GenEP に対してどのような意見をもっているのか、具体的にどのようなことが要望されているのかを探りたい。

### 一 単純回答の分析

データ情報	N	%
有効ケース	2103	99.3
システム欠損値	14	0.7
合計	2117	100.0

独立変数：性別	N	%
女性	904	43.0
男性	1185	56.3
無回答	14	0.7
合計	2103	100.0

独立変数：学年	N	%
無回答	23	1.1
1年生	402	19.1
2年生	823	39.1
3年生	468	22.3
4年生	255	12.1
M1	86	4.1
M2	21	1.0
M3以上	1	0.0
D1	10	0.5
D2	7	0.3
D3	4	0.2
D4以上	3	0.1
合計	2103	100.0

全回答 2117 ケースのうち、有効回答は 2103 ケース、無効回答は 14 ケースであった。2103 人のうち、女子学生は 904 人、男子学生は 1185 人、無回答は 14 人であった。分

析において、無回答は欠損値に指定した。学年は1年生402人、2年生823人、3年生468人、4年生255人、修士課程1年は86人、修士2年は21人、修士3年以上は1人、博士課程1年は10人、博士2年は7人、博士3年は4人、博士4年以上は3人であった。大学院生はクラス数が少なかつたため分析においては「院生」としてコーディングした。「院生」はあわせて132人であった。学部生は、2年生が多く、4年生が少ないのが特徴といえる。ただし、性別と学年のばらつきは一橋大学全体のばらつきと比較する必要はある。

### (1) GenEPの認知と情報源

#### ① GenEPの認知

従属変数：

GenEP認知	N	%
知らなかつた	1165	55.4
知っていた	905	43.0
無回答	33	1.6
合計	2103	100.0

GenEPの認知×性別	女性	男性	合計
知らなかつた	402	757	1159
	45.2%	64.8%	56.3%
知っていた	487	411	898
	54.8%	35.2%	43.7%

合計 889 1168 2057  
 $p < 0.01$

GenEPの認知×学年	1年生	2年生	3年生	4年生	院生	合計
知らなかつた	276	434	245	152	42	1149
	69.0%	53.5%	53.5%	60.8%	32.3%	56.1%
知っていた	124	377	214	98	88	900
	31.0%	46.5%	46.5%	39.2%	67.7%	43.9%
合計	400	811	458	250	130	2,049

$p < 0.01$

GenEPは約4割の学生に認知されていた。認知と性別をクロス分析したところ、女子学生の方が男子学生よりも有意に認知していた者の割合が高かつた( $\chi^2$ 検定1%水準)。認知していた者の割合は女子学生の方が約20%高く、反対に認知していない者の割合は20%低かつた。次に、認知と学年をクロス分析したところ、学年があがるほど、認知者の割合が有意に高まることわかつた( $\chi^2$ 検定1%水準)。ただし、4年生だけは認知していた者の割合がしてなかつた者の割合より低い。

② GenEP 認知の情報源

従属変数：認知の情報源	N	%		有効ケース 中%
		女性	男性	
公開講座	75	6.6		8.3
報告書・リーフレット	508	45.0		56.5
先輩・同輩	51	4.5		5.7
先生	275	24.4		30.6
以前に受講	154	13.7		17.1
その他	65	5.8		7.2
合計	1128	100.0		125.5
有効ケース数 899	欠損値数 1218			

GenEP の情報源×性別	女性		男性		合計
	N	%	N	%	
公開講座	39	6.1%	36	7.5%	75
報告書・リーフレット	294	45.9%	209	43.7%	503
先輩・同輩	32	5.0%	18	3.8%	50
先生	161	25.1%	112	23.4%	273
以前に受講	90	14.0%	64	13.4%	154
その他	25	3.9%	39	8.2%	64
合計	641	100.0%	478	100.0%	1,119
有効ケース数 893	欠損値数 1224				

GenEPの情報源×学年	1年生	2年生	3年生	4年生	院生	合計
公開講座	4 2.9%	10 2.3%	13 5.0%	23 15.4%	25 17.5%	75 6.7%
報告書・リーフレット	77 56.2%	207 47.6%	105 40.5%	54 36.2%	62 43.4%	505 45.0%
先輩・同輩	6 4.4%	21 4.8%	6 2.3%	6 4.0%	12 8.4%	51 4.5%
先生	16 11.7%	79 18.2%	88 34.0%	57 38.3%	33 23.1%	273 24.3%
以前に受講	20 14.6%	89 20.5%	31 12.0%	4 2.7%	10 7.0%	154 13.7%
その他	14 10.2%	29 6.7%	16 6.2%	5 3.4%	1 0.7%	65 5.8%
合計	137	435	259	149	143	1,123
有効ケース数	895					
欠損値数	1222					

GenEPを認知していた者に認知の情報源を聞いたところ、「報告書・リーフレット」、「先生」、「以前に受講」（この選択肢は冬学期のアンケートのみである）、「公開講座」、「その他」、「先輩・同輩」の順に回答者数が多かった。特に「報告書・リーフレット」は回答者の45%を占めており、GenEP周知において大きな役割を果たしていることが推察される。また、教員からGenEPを知った者が24.4%を占める一方、他の学生から知った者は4.5%に留まっている。学生間でGenEPについて話し合う機会が少ないことが推察される。また、「公開講座」と回答した者も6.6%に留まっており、公開講座の学生への周知が不足しているか、公開講座がGenEPと関連づけて理解されていないことが推察される。

学年別で見ると「高学年ほど公開講座を通じてGenEPを知った」、「高学年ほど教員から知った」傾向が見て取れる。1番目の傾向の理由として、高学年ほど公開講座に参加していることが考えられる。2番目の傾向は、高学年ほどゼミ等を通じて頻繁に教員とコミュニケーションを取っていることが理由だと考えられる。なお、ジェンダー差については特筆すべき傾向は見取れなかった。

(2) 履修の影響

従属変数：履修の影響	N	%	有効ケース中%
キャリアデザインのポイント	639	11.2	35.2
ジェンダーを考える機会	1190	20.8	65.5
社会理解の新たな視点	1624	28.4	89.4
認識の変化	734	12.8	40.4
理論・方法の学習	675	11.8	37.1
既存研究へのジェンダー視点	862	15.1	47.4
合計	5724	100.0	315

有効ケース数 1817  
欠損値数 300

履修の影響×性別	女性	男性	合計
キャリアデザインのポイント	332	305	637
ジェンダーを考える機会	12.6%	10.0%	11.2%
	545	639	1,184
社会理解の新たな視点	20.7%	20.9%	20.8%
	717	899	1,616
認識の変化	27.3%	29.4%	28.4%
	322	408	730
理論・方法の学習	12.2%	13.3%	12.8%
	303	368	671
既存研究へのジェンダー視点	11.5%	12.0%	11.8%
	411	444	855
	15.6%	14.5%	15.0%

合計 2,630 3,063 5,693  
有効ケース数 1809 欠損値 308

履修の影響×学年	1年生	2年生	3年生	4年生	院生	合計
キャリアデザインのポイント	132 11.0%	245 12.0%	144 11.5%	81 10.8%	35 7.9%	637 11.2%
ジェンダーを考える機会	280 23.3%	405 19.9%	259 20.7%	148 19.8%	88 19.8%	1,180 20.8%
社会理解の新たな視点	323 26.8%	616 30.3%	346 27.6%	214 28.6%	114 25.7%	1,613 28.4%
認識の変化	180 15.0%	243 11.9%	161 12.9%	84 11.2%	60 13.5%	728 12.8%
理論・方法の学習	131 10.9%	222 10.9%	161 12.9%	99 13.3%	58 13.1%	671 11.8%
既存研究へのジェンダー視点	158 13.1%	304 14.9%	181 14.5%	121 16.2%	89 20.0%	853 15.0%
合計	1,204	2,035	1,252	747	444	5,682
有効ケース数 1804	欠損値 313					

履修の影響を聞いたところ、「社会理解の新たな視点」、「ジェンダーを考える機会」、「既存研究へのジェンダー視点」、「理論・方法の学習」、「キャリアデザインのポイント」の順で回答が多かった。全体的な傾向としては「理論・方法の学習」(11.8%)、「既存研究へのジェンダー視点」(47.4%)といったアカデミックな変化よりも、「社会理解の新たな視点」(89.4%)、「ジェンダーを考える機会」(65.5%)といったより広い社会認識に影響を与えたといえる。

ただ、学年別に見ると「既存研究へのジェンダー視点」、「理論・方法の学習」といった影響は高学年において相対的に高い割合を示している。ただし、これは学年の影響ではなく授業の影響も考えられる。高学年ほどより専門的な授業を履修する傾向があり、そのため影響がアカデミックなものとなる可能性がある。

また、本項目についても特筆すべきジェンダー差は見られなかった。



(3) 中高ジェンダー教育×履修の影響

独立変数：中高ジェンダー教育	N	%	有効ケース中%				
			ジェンダー・フリー	家庭科	女性解放の歴史	フェミニズム論	ジェンダー論
性教育	1398	28.6	87.6				
ジェンダー・フリー	605	12.4	37.9				
家庭科	1372	28.1	86.0				
女性解放の歴史	646	13.2	40.5				
フェミニズム論	310	6.3	19.4				
ジェンダー論	552	11.3	34.6				
合計	4883	100.0	306.1				
有効ケース数 1595							
欠損値数 522							
履修の影響× 中高ジェンダー教育	性教育	ジェンダー・フリー	家庭科	女性解放の歴史	フェミニズム論	ジェンダー論	合計
キャリアデザインへのヒント	392	184	376	195	93	169	1,409
ジェンダーを考える機会	787	324	776	364	162	303	2,716
社会理解の新たな視点	21.1%	20.2%	21.2%	20.9%	19.0%	20.0%	20.7%
認識の変化	1,053	460	1,035	488	236	414	3,686
理論・方法の学習	28.2%	28.6%	28.3%	28.1%	27.6%	27.3%	28.1%
既存研究へのジェンダー視点	500	216	486	223	105	197	1,727
	13.4%	13.4%	13.3%	12.8%	12.3%	13.0%	13.2%
	450	190	446	211	109	192	1,598
	12.0%	11.8%	12.2%	12.1%	12.8%	12.7%	12.2%
合計	553	233	539	257	149	241	1,972
	14.8%	14.5%	14.7%	14.8%	17.4%	15.9%	15.0%
有効ケース数 1365	3,735	1,607	3,658	1,738	854	1,516	13,108
欠損値数 752							

中高においてどのようなジェンダー教育を受けてきたかを問うたところ、「性教育」、「家庭科」、「女性解放の歴史」、「ジェンダー・フリー」、「ジェンダー論」、「フェミニズム論」の順に回答が多かった。また、この変数と履修の影響とをクロス分析した結果、特筆すべき傾向はみとれなかった。なお、変数間によって欠損値数に大きな隔たりがあるため、回答結果が多少変動していることに注意されたい。

#### (4) 履修希望

従属変数：履修希望	N	%
とるつもり	208	9.9
なるべくとるつもり	295	14.0
関心があれば	1225	58.3
とるつもりはない	142	6.8
わからない	197	9.4
無回答	36	1.7
合計	2103	100.0

履修希望×性別	女性	男性	合計
とるつもり	135	73	208
	16.1%	7.1%	11.2%
なるべくとるつもり	138	155	293
	16.5%	15.1%	15.7%
関心があれば	534	685	1,219
	63.9%	66.8%	65.5%
とるつもりはない	29	112	141
	3.5%	10.9%	7.6%
合計	836	1,025	1,861

p<0.01

履修希望×学年	1年生	2年生	3年生	4年生	院生	合計
とるつもり	36 10.0%	73 9.9%	47 10.9%	26 12.8%	24 19.7%	206 11.1%
なるべくとるつもり	70 19.4%	101 13.7%	54 12.5%	36 17.7%	34 27.9%	295 15.9%
関心があれば	234 65.0%	521 70.6%	289 67.1%	112 55.2%	60 49.2%	1,216 65.6%
とるつもりはない	20 5.6%	43 5.8%	41 9.5%	29 14.3%	4 3.3%	137 7.4%
合計	360	738	431	203	122	1,854

p<0.01

今後、GenEPの履修を希望するかどうか聞いたところ、「関心があれば」、「なるべくとるつもり」「とるつもり」、「わからない」、「とるつもりはない」、「無回答」の順番で回答が多かった。なお、分析においては「無回答」は欠損値に指定した。全体的な傾向としては、「関心があれば」が58.3%を占める一方、「とるつもり」は9.9%、「とるつもりはない」は6.8%に留まり、履修するかどうかは授業内容に関心を持てるかどうかによって決める学生が多いことがあげられる。なお、クロス分析においては「わからない」、「無回答」を欠損値に指定している。

ジェンダー差は、女子学生の方が男子学生に比べ有意に履修を希望していることが明らかにになった ( $\chi^2$ 検定 1%水準)。

また、学年についても高学年になるほど有意に履修を希望することが明らかになった ( $\chi^2$ 検定 1%水準)。ただし、4年生は「とるつもりはない」と答えた学生の割合は平均の2倍となっている。これは恐らく4年生が最終学年であることが関係していると思われる。

川口 遼 (一橋大学大学院社会学研究科・修士課程)

## 二 自由回答の分析

ここでは、GenEP アンケートの間 4 「GenEP についての意見や提案、期待することなどを自由にお書きください」という設問に対する回答から、ジェンダー教育プログラムに対する、学生の関心のあり方や要望などを分析したい。

### ◆ジェンダー教育プログラムに対する関心の高さ

今回のアンケート自由回答からは、概して、本プログラムに対する学生の関心の高さがうかがえた。宣伝不足を指摘し、より広範なアピールを求め意見が多く寄せられ、もっと多様な講義を開いてほしい、いくつかの科目を必修にしてもよいのではないかと、といった声も複数あがっていた。これらから、多くの学生が本学におけるジェンダー教育プログラムの開始を歓迎するとともに、このプログラムの学内への浸透を期待しているとの感触を得た。

以下、具体的にみていくと、もっとも多かったのは、「興味深いのもっと大々的に広告すべき」「より積極的にプログラムの存在を宣伝すれば、学生の関心も高まると思います」「このプログラムの存在をもっと一般の学生に広く知ってもらえるような措置をしてほしい。ジェンダーが本学のウリの一つになればいい」など、積極的かつ効果的な宣伝によって学内への周知を求める意見であった。ジェンダー教育プログラムの始動については、新学期にリーフレットを通して周知を行っていたが、「知っている」43.0%、「知らなかった」55.4%というアンケート問 1 の結果からもみてとれるように、初年度ということもあり十分な周知ができていなかった点が反省される。宣伝体制については、2 年目の 2008 年度からは学修ガイドへの掲載もあわせて行うなど、学生に対して十全に周知をはかっていくように努めている。

ジェンダー教育プログラムへの関心は、より多様な科目の開講を求める声や、いくつかの科目を必修にすべき、ダイプロラの発行や副専攻のような扱いになればいいという意見が複数寄せられたことから確認できる。いくつかの科目を必修にすべきという意見は、ジェンダー概念について系統的に学ぶ機会がこれまでにほとんどなかったこと、また、ジェンダーに対する無知や偏見が蔓延している状況にあつては、社会に出る前にジェンダーに対する基礎的な素養をしっかりと身につける必要がある、という理由からジェンダー教育プログラムの重要性を指摘している。具体的には「大学を出たらもう勉強する機会がないので必修にすべき」「意識の低さに驚くので必修にするくらいがいい」などである。また、ダイプロラのようなものを発行してほしいという意見も複数みられた。

そのほか寄せられた声として、「今社会で、『ジェンダー』が問題になっていることを気づかせることが出来るように頑張ってください」「これからの男女共同参画社会を実現する上で、ジェンダー教育は重要だと思うので、充実したプログラムを期待します」「ジェンダーに関して興味はあるものの、触れる機会が少なく、期待しています」「ジェンダーという学問分野が、もっと色んな人に関心を持たれるようになればいい」「様々な分野でのジェンダーを考えるきっかけになればいいと思います」といったものがあつた。

また、「社会科学の総合大学として」といった意見も寄せられた。本プログラムのように、基幹科目を軸としながらも多様な講義が連携科目として位置づけられているプログラムは、社会科学の総合大学として充実した教員・講義の質を備えた大学であるからこそ可能となっており、一橋大学の強みを生かしたものだといえるだろう。

#### ◆「ジェンダー」という用語への偏見／

プログラムとしてジェンダーを取り上げることへの懐疑

このように、ジェンダー教育プログラムの設置を歓迎する声が多くみられる一方で、懐疑的・否定的にとらえる意見もみられた。その多くは、「ジェンダー」という用語を、女性の利己的・一方的な権利の主張ととらえている。たとえば、「ジェンダーと女性ひいきは違うということを明確にしてもらいたい」「女性のエゴにならないようにしてください」「ジェンダー教育といいながら、結局女性優位論になっている」などである。また、ジェンダーを扱うことを、イコール男性批判と受け止めているものもあり、「男性批判に一辺倒にならないように」という意見があった。

これらの意見とは別に、ジェンダー教育の重要性は認めつつも、それをプログラムとして展開していくことへの懐疑もいくつかみられた。たとえば、「ジェンダーについては重要な分野だとは思いますが、特にプロジェクトをたちあげてまで推進するものでもないと思う」といった回答がこれにあたる。また、「あまりジェンダー教育にこだわる事が逆に区別につながってしまう気がする」「あまりジェンダーにこだわる理由が理解できない。事実として違いがあることはわかるが、それを論じることの意義がわからないこともある」という意見もみられた。これらの意見は、これまでジェンダーについて触れたり学んだりする機会がなかった学生の「素朴」な反応でもあるだろう。こうした反応に対してこそ、プログラムによる積極的な認識の変容が求められているのではないか。

また少数ではあるが、「ジェンダーに興味はあるが、就職活動などに不利になるということも聞くので」という意見があった。こうした意見に鑑みても、ジェンダー教育の必要性を最終的には学内にとどめるのではなく、社会全体としてジェンダー公正・男女共同参画の実現が求められていることがあらためて確認される結果となった。そして、社会の現状とのギャップに対するこうした認識は、このプログラムにどのようなものを求めるかという意見にも反映されている。

#### ◆どのようなプログラム・講義が求められているか

プログラムに求めるものとして多かった意見は、第一に、男性にも興味をもってもらえるもの、男性（学生・教員）の意識改革につながる授業を期待する声であり、第二に、理論にとどまらず実践に結びつくものを要望する声であった。

前者については、ジェンダー＝女性（について）の問題という認識が広く存在しており、男性には関係のないテーマと思われること、またたとえ興味をもったとしてもとっつきにくいという状況を反映している。「男子学生にも興味をもってもらえるような内容」「男子学生にこそ興味をもってほしい」「一橋は男性の教員が多いので」といった声が多く寄せられた。これらはプログラムを歓迎し、その定着を望む意見であるが、ここからも「ジェンダー」＝女性の問題という認識が広くあることがうかがえる。そし

て、興味深いのはこうした回答を寄せたのは女子学生のみでなく、男子学生にも多かったことである。このことは、男子学生においてもジェンダー概念への関心が高まっていることを示している。

後者については、具体的には「学問の域を出た実際に行き届くアクションを考えさせるものにして欲しい」「理論で終わってしまうことなく、個人個人の意識変革につながっていく内容を期待します」「理論や制度にとらわれず『意識改革』にふみ込んだアプローチを期待します」「教育の成果を教室内にのみとどめるのではなく、学内全体、ひいては学外にまで広げる努力をしてほしい」といった回答である。これから社会に出て行く学生にとって、いくら講義や大学のなかでジェンダー概念を学んだとしても、社会全体の認識が変容しなければ、やはりそうした考え方や実践をしていくことは困難とならざるをえない。こうした意見は、そのことを自覚しつつ、より実践的な教育プログラムを求めたものであった。

この点を、より具体的に提案しているものとしては、「一橋大学内では、比較的ジェンダー意識が高いと感じるが、実際の社会での現状を教えてほしい」「男女共同参画に対する、企業、行政の具体的な取り組みを学べたらうれしい」「公開の講演会を多くとり入れ、第一線の研究者や活動家の話を聞く機会がほしい」など、実際の社会の現状や企業の取り組み、外部講師の講演などを求める意見があった。

具体的な講義テーマについては多様な声があったが、複数あがった意見として、第一に「ジェンダー論そのものを取り上げる講義を希望する」「独立した形でのジェンダーを学びたい」「ジェンダーの専門科目を増やしてほしい」など、ジェンダー問題そのものを学びたいとする意見である。この点については、GenEPの2年目より佐藤文香先生による「ジェンダー論」が開講されたことで、ある程度要望に応えられたものと思われる。複数の要望があった講義テーマの二つ目は、「ジェンダーと教育」である。こうした取り組みは、たとえば愛知教育大学における取組みが参考になるだろう。同大学では、愛知教育大学男女共同参画委員会編『男女平等教育シリーズ—男女共同参画社会をめざして—』というシリーズで研究成果を報告している。一橋大学は教育学部をもっていないが、これらの意見はおそらく、自らの受けてきた教育経験に基づき関心からきているものと思われる。

これ以外に、講義のスタイルについての意見として、「授業に出て、考えることを重視してほしい」「議論を深める形式の講座を期待します」「ゼミ形式、実地訪問などのできる人数で行うべきだと思う」など、一方的に講義を聴くスタイルでなく、ゼミ形式での議論の重視や少人数で協働して調査を行うようなスタイルを求める声があった。前述の「実践的」な授業に対する要望とも重なる部分であるが、一方的でなく双方向的な授業、参加型の授業、討論形式の授業スタイルを求める声が多かった。

#### ◆今後の課題

プログラムへの改善点として上げられた意見から、主な課題として、低学年でとれる共通科目の充実、社会学部以外での科目の開講、連携科目の充実の3点が浮かび上がった。

現在のところ、基幹科目は学部発展科目が多くなっており、連携科目のなかでもジェ

ンダーを扱う頻度が高い科目については、やはり学部発展科目が多い。学部の1年生からとれる講義において、基幹科目や連携科目のうちでもジェンダーを多く扱う科目を充実させていくことが課題となる。

また、現行の GenEP 科目のほとんどは社会学部・社会学研究科で開講されており、他学部・研究科の講義はごくわずかである。アンケートの意見でも「社会学部に偏らないように」「他学部でこそやるべき」といった声が多く、全学的なジェンダープログラムとしての本プログラムの主旨に照らししても、社会学部・社会学研究科以外の学部・研究科において GenEP 科目を拡充していくことは今後の大きな課題である（なお、2009年度のプログラムにおいては、社会学部・社会学研究科以外の科目も増えてきている）。

連携科目の量的・質的な充実については、GenEPの初年度ということもあり、GenEP科目を担当する教員とのコミュニケーションを十分に、また円滑にはかつていくという面において課題が残されており、そのことを指摘した意見が多かった。本プログラムは、ジェンダーを中心に扱う基幹科目と、ジェンダーの視点を導入する連携科目とで成り立っているが、プログラムの1年目ということで連携科目に位置づけられている講義を担当する教員のあいだにもジェンダーに対する認識・温度差のばらつきがあった。その点を指摘する声も複数寄せられており、連携科目をどのように充実させていけるかは、プログラム全体の評価にもかかわる重要な点であろう。

プログラムの2年目である2008年度は、こうした点を少しでも改善できるよう、GenEP科目を担当している教員には、新学期に「2008年度版 GenEP リーフレット」を配布し、初回の講義で各科目が GenEP の連携科目に位置づけられていることを学生にあらためてアナウンスしてもらうなどの対策を講じた。さらに、2008年度以降は、学部に配布される学修ガイドにも GenEP が掲載されることとなり、これによって学期の初めに多くの学生に GenEP について周知できるようになった。

小野 百合子 (CGrASS リサーチ・アシスタント/社会学研究科・博士課程)

### 三 2007/2008年度「男女共同参画時代のキャリアデザイン」への学生の反応

2007年度に GenEP の基幹科目として開講された、「男女共同参画時代のキャリアデザイン」は、企業や官公庁などで現在活躍している本学の卒業生を中心に講師として招聘し、オムニバス形式で、各界における男女共同参画の実践について学生にお話しいただくという講義である。

2006年度の学生意識調査でも、キャリアデザイン・労働とジェンダーに対する学生の高い関心がかがえたし、前節の GenEP 受講者アンケート全体の総括においても、実際の社会の現状や企業の取り組みを講義の中で取り上げて欲しいという声が見られた。従って、このような講義への学生の潜在的なニーズは高いものと思われる。

それでは、実際に講義を受講した学生は、どのような感想を抱いたのだろうか。両年度の GenEP アンケートにそれぞれ設けられた「講義への感想」という自由記述欄から、いくつか取り上げてみたい。

全体的に見て学生からの評価は肯定的なものが多く、とりわけ目立つのは、以下のように、講師の話を聞いて刺激を受け、あるいはまた力づけられることによって、前向きに自らのキャリアデザインを描けるようになったという内容のものである。

「これからの大学生活、そして卒業後の人生を考える上での糧になるものを得られたと思います。前向きに、もっと自信持って頑張りたいなあと思いました」「人生におけるロールモデルが色々手に入ったと思う。モチベーションが上がった」「社会に出ることは単に会社の歯車になることだという考えを改められました」。

実際に働いている方のお話を聞く機会は、学生にとっては就職活動の時期以外にはあまりないので、「働くことが身近に感じられた」という効果がこの授業にはあったようである。また、単に多様な職種の方からお話が聞けるということだけでなく、講師の約半数は女性であり、「女としてこれからのキャリアについて大変勇気づけられるものでした」「女性でも結婚後や子どもを産んでもからも仕事ができることを学んだ」など、女子学生へのエンパワメント効果もあった。

さらに、この講義が、現実には起きている性差別やジェンダーへの関心を喚起し、それに対する具体的な取り組みを学べる場でもあったことが、以下のような学生の声からはうかがえる。

「まだまだ男女共同参画社会が達成されるには長いということ。これから自分が社会に出るに当たってもっと進歩してほしいと思った」「ジェンダーに関することは、まだまだ自分の知らないことが多いんだなあ、と感じます。自分達の世代がそのような『悪いもの』についてはなくしていく世代なのかなと思います」「これから社会に出る立場の私には、世の中にはまだまだ差別があることにショックをうけたが、その改善へのとりくみも学べて、少し希望がもてた」。

しかし一方で、「授業の質にはばらつきがある」という否定的評価も少なからず見られ、男女共同参画やジェンダーについてあまり取り上げない講義があることに對して、不満がもたらされている。この点は、今後改善が必要であろう。

中村 江里 (CGraSS リサーチ・アシスタント／社会学研究科・博士課程)



## ジェンダー教育プログラム (GenEP) 授業アンケート 2007

2005年度～2006年度に実施した「一橋大学における男女共同参画社会実現に向けた全学的教育プログラムの策定」プロジェクト (GenEP) により、今年度より本学において体系的なジェンダー教育プログラムが本格的に動き始めました。

このアンケートは、ジェンダー社会科学研究センターの GenEP 部門が、今後のジェンダー教育プログラムの改善に資する目的で実施するものです。アンケートの分析結果は、この目的にのみ使用します。一橋大学らしいジェンダー教育プログラムを作り上げていくための参考にさせていただきますので、皆様のご協力をお願い致します。

### 【記入にあたっての注意事項】

- ・ 質問は見開き2ページです。左ページの質問には、すべての方が答えください。右ページの質問には、今年度このアンケートに初めて回答する方のみお答えください。夏学期にこのアンケートにご協力いただいた方は、記入が不要です。
- ・ 記入が終わりましたら、先生に提出してください。

\*アンケートに関するご質問がありましたら、下記のアドレスまでお問い合わせください。

一橋大学大学院社会学研究科内  
ジェンダー社会科学センター GenEP 部門  
[genep@soc.hit-u.ac.jp](mailto:genep@soc.hit-u.ac.jp)

\*\*\*こちらのページの質問はすべての方にお聞きします\*\*\*

1) このアンケート以前に、本学のジェンダー教育 (GenEP) プログラムについて知っていましたか。

1. 知っていた。 2. 知らなかった。

1. 知っていた と回答された方にお聞きします。(複数選択可)

1. 公開講座などに参加したことがある。 2. 報告書やリーフレットをみたことがある。 3. 先輩・同輩から聞いたことがある。 4. 先生から聞いたことがある。  
5. 夏学期に受講した。  
6. その他 (具体的に: )

2) この授業の受講が次の点に影響を与えたと考えますか。下の1～6それぞれについて、(ア)～(ウ) から最も近いものを1つ選んで○をつけてください。

	(ア) う そう 思	(イ) わ ない そう 思	(ウ) な い わ か ら
1. 就職や人生設計を含むキャリアデザインを考えるうえでヒントを得た			
2. ジェンダーや男女共同参画について考える機会を得た			
3. 社会を理解するうえで新たな視点を得た			
4. ジェンダーや男女共同参画についての認識が変化した			
5. ジェンダーや男女共同参画に関わる基礎知識を身につけ、その理論と方法を学んだ			
6. 既存の社会科学の研究にジェンダー視点を導入する意義とそれがもたらす可能性を学んだ			

3) 今後も、ジェンダー教育プログラムのなかの授業をとりたいたいと考えていますか。

1. とるつもりである。 2. なるべくとるようになりたい。 3. 関心あるテーマであればとるつもりである。 4. とるつもりはない。 5. わからない。

4) 一橋大学におけるジェンダー教育プログラムについての意見や提案、期待することなどを自由にお書きください。

5) あなた自身の性別・ご所属・学年に○をつけてお答えください。

性別 (\*性別自認) A. 男性 B. 女性

所属【学部】 A. 商学部 B. 経済学部 C. 法学部 D. 社会学部

【大学院】 A. 商学研究科 B. 経済学研究科 C. 法学研究科 D. 社会学研究科 E. 言語社会研究科

学年【学部】 A. 1年生 B. 2年生 C. 3年生 D. 4年生

【大学院】 A. M1 B. M2 C. M3以上 D. D1 E. D2 F. D3 G. D4以上

\*ここからの質問は、今年度はじめてこのアンケートにお答えいただく方のみお答えください。  
\*夏学期にこのアンケートにご協力いただいた方は、記入なさらないでけっこうです。

- 6.) ジェンダーや男女共同参画に関わる基礎知識を、これまで学ぶ機会がありましたか。
- ① 中学や高校などで、次のような内容に触れた授業や学習の機会をもったことがありますか。下の1～6それぞれに(ア)～(ウ)から当てはまるものを1つ選んで○をつけてください。

	(ア) ある	(イ) ない	(ウ) わからない
1. 性教育			
2. ジェンダー・フリー教育			
3. 家庭科(高校)			
4. 女性解放の歴史			
5. フェミニズム論			
6. ジェンダー論			

- ② これまでに本学で、ジェンダーやセクシュアリティに関わる内容に触れた講義や演習(ゼミ)を受講する機会をもったことがありますか。下の1～6の科目群ごとに(ア)～(ウ)から当てはまるものを1つ選んで○をつけてください。

※ 履修学年に達していない場合には「(イ) ない」をお選びください。  
※ なお、「教養ゼミ」は「2. 全学共通科目(外国語以外)」に、商学部・法学部の「導入ゼミ」と社会学部の「社会研究入門ゼミ」は「3. 学部教育導入科目」に、経済学部の「基礎ゼミ」は「4. 学部教育基礎科目」に該当します。) )

	(ア) ある	(イ) ない	(ウ) わからない
1. 全学共通教育科目(外国語)			
2. 全学共通教育科目(外国語以外、「教養ゼミ」を含む)			
3. 学部教育導入科目(経済学部は100番台科目、商・法「導入ゼミ」・社会「社会研究入門ゼミ」を含む)			
4. 学部教育基礎科目(経済学部は200番台科目、経済「基礎ゼミ」を含む)			
5. 学部教育発展科目(経済学部は300・400番台科目)			
6. 演習(ゼミ)			

\*アンケートへのご協力、どうもありがとうございました。



## 第六章

### GenEP 科目担当教員の声

第六卷

庚辰年庚辰年庚辰年庚辰年庚辰年

## 第六章 GenEP 科目担当教員の声

一橋大学ジェンダー教育プログラムは、ジェンダーを授業の主軸とする基幹科目と、既存の社会科学・人文科学の枠組み・体系をジェンダーの視点から問い直していく学際的な科目群である連携科目とで成り立っている。現在のところ、連携科目の多くは、社会学部/社会科学研究所で開講されているが、全学的なカリキュラムとして展開していくためにも、他学部/研究科における GenEP 科目の拡充が望まれる。また、GenEP プログラムの自由回答においても、社会学部以外の学部/研究科でこそ GenEP 科目を増やしてほしいという要望が多く寄せられた。

よって、ここでは社会学部のみならず、経済学部、法学部、言語社会研究科などで GenEP 科目を担当されている先生方のご意見を紹介したい。

### <質問項目>

1. どのような問題意識・関心から一橋大学ジェンダー教育プログラムにエントリしてくださったのでしょうか。
2. 先生ご自身は、どのような経緯からジェンダー問題に興味をもたれたのでしょうか。また、“ジェンダー”という視角を取り入れることは、ご自身の研究領域において、どのような意味をもたれるとお考えでしょうか。
3. 先生の講義が GenEP の連携科目の一つに位置づけられたことで、講義の組み立てや運営について、ご苦勞なされた点などございましたら教えてください。また、GenEP の運営について、ご意見がございましたら、ご自由にお書きください。

### ◆ 経済学部/経済学研究所

#### 川口大司先生【労働経済学/労働とジェンダー】

1. 4 学部での貴重な取り組みに一橋大学の構成員として協力することは重要だと思いましたが、参加しました。またこの機会に、男女間賃金格差が発生するメカニズムについて、経済学者がどのように考えてきていて、どこまでそのメカニズムの説明が進んでいるのか、自身の研究も含めて経済学を専攻しない学生も含めた聴衆の方々に広く紹介し、経済学の有用性を知ってもらいたいと思っただけで参加した理由です。
2. 賃金格差が発生するメカニズム全般に関心を持つ中で男女間の賃金格差が発生するメカニズムにも興味を持ったのが理由です。“ジェンダー”という視角を取り入れることにより、経済における分業や市場を通じない資源配分のメカニズムの理解がいくつそう進むと考えています。また通常の経済分析においては外生的に与えられていると考えられてきた人々の選好の形成過程に光を当てても貴重な題材を提供していると考えられ、私自身もそのような研究を進めてきました。
3. リレー講義の一部を担当させていただきましたが、担当の本本先生や TA の秋山さんには大変お世話になりました。1 回の講義だけの担当でしたが、とても貴重な機

会を提供していただいております。講座運営のため大変なご努力に頭がさがる思いです。もしも可能であれば、プロジェクターがあらかじめ設置されている教室を確保していただければさらにすばらしいと思います。

◆ 法学部／法学研究科

柘植道子先生【ジェンダーと心理学／Intro to Counseling Psychology】

1. 私からかかわったのではなく、GenEPからお声をかけていただいたように記憶しています。日本の心理学はさておき（日本で修士まで取りましたが、その後、二つ目の修士、博士と米国です）、米国の心理学ではジェンダーや多様性は、すべての心理学者が抑えておくべきこととされており、倫理規定にも明記されている事項です。日本に帰国後、この領域があまりにも認知されておらず、GenEPは果たされる役割は大きいと理解しており、趣旨にも賛同しましたので、開講していた「ジェンダーと心理学」をエントリさせていただきました。
2. 1とも重複いたしますが、ジェンダーの視点なしでは、アメリカ心理学会が定義する心理学者としての価値がありません。ジェンダーを無視して心理学の研究はありえないとまでいえると思いますが、今は、ジェンダーに関する研究を行うつもりでおります。
3. 「ジェンダーと心理学」は発展科目に属するべき科目です。心理学の基礎知識をもち、ある程度の学習心理学、発達心理学、社会心理学、統計などを理解したうえで、開講するのが望ましいというのが、米国大学での理解です。ただ、私は法学部の留学生専門教育教員であり、「ジェンダーと心理学」を共通教育科目としてしか開講ができません。そのため、心理学初心者にも理解できるよう、心理学の導入とともジェンダーの問題を扱わざるを得ず、導入に時間がとられてしまい、本質のジェンダー問題を深く掘り下げることは困難でした。その代わり、理論や研究を多く紹介し、学生個人が内省できるような課題をだしたり、いわゆる心理学的アンケートに答えさせたりして、自分発見をさせたりしました。米国では「ジェンダーと心理学」の受講生は30人前後が望ましいとされており、本講義でも人数制限を行おうかとも思いましたが、多くの学生にこのトピックについて触れてもらうことも必要かと感じており、「内容の濃いものを少数に」と「多くの人に少しでもこのトピックに触れてもらう」の二つの間で揺れ動いております。

阪口正二郎先生【労働とジェンダー】

1. 木本さんに誘われて参加しました。プログラムの趣旨にも賛成です。
2. 私の専門は憲法ですが、法学の分野でもgender法学は国内外で盛んです。また憲法の分野では、平等の領域や差別表現の規制の問題などでgenderが絡む問題があります。私自身も論文で取り上げたことがあります。



3. 特に従来と変更してはしません。憲法の講義のいろんな部分で gender 問題を扱っています。

#### ◆社会学部／社会学研究科

##### 関啓子先生【環境教育学／教育の歴史】

1. GenEP 創設期にかかわったものとして、教育プログラムには関心と期待をもっています。責任も感じています。ジェンダー視角は、自分の研究においても、担当科目の専門性にとっても重要ですから、エントリーしました。
2. 若いころから関心をもっていました。はじめは、教育思想史からの関心でした。しだいに現実の教育問題を考察するようになり、ジェンダー視角の重要性をいつそう切実に感ずるようになりました。いま、環境教育を担当していますが、環境問題の解説と解決には、研究視角としてエスニシティとジェンダーは不可欠です。しかし、ジェンダー視角の導入は国際的にはなされているものの、日本ではほとんどみられません。また、海外の先行研究にも満足できません。もっと踏み込みたいと願っていますが・・・。
3. 「教育の歴史」や「環境教育学」など半年講義ですから、時間が十分にさけないことが、残念です。GenEP の運営についてですが、教育プログラムを育てていただき、感謝と敬意を表します。一橋大学ならではの教育プログラムにゆつくりと育てていただければと願っています。

##### 林大樹先生【まちづくり夏・冬／人間環境論／コミュニティ政策論】

1. 全学共通教育科目「まちづくり」は、開講当初から現在まで「人間環境キーステーション構想」というコンセプトにもとづいて授業設計を行っている。その「人間環境キーステーション構想」は国立という地域社会が直面する主要な課題の一つとして「ジェンダー」を挙げており、過去にジェンダーをテーマとする学生のプロジェクトが授業内で活動した学期もあった。今後も「まちづくり」授業においてジェンダー視点への着目を続けるため、エントリーしている。
2. 修士論文でパートタイム労働を扱ったことから女性労働研究に関心を持った。ただし、私事ながら女性労働の研究文献を渉猟したわけではない。地域社会を対象として調査研究をしたり、市民と協働するに際して、ジェンダー視角を持つことは一種の社会常識として身につけておかなければ不都合が多いが、私自身、ジェンダー視角を前面にだして研究しているわけではない。
3. もしかししたら、GenEP の連携科目をコーディネーターとして先生方の意図とはずれているかもしれないが、あまり堅苦しく考えずに、必ずジェンダーの講義等を入れなければならないとは思わないで授業運営しているので、苦勞ということはありません。

### 森村敏己先生【社会研究入門ゼミ】

1. 私自身はジェンダー問題を専門としていないわけではありませんが、専門として18世紀フランス思想史を授業で扱うに際して、家族、女性と政治権力、革命期における女性の表象といったテーマに議論が及ぶことがあるというのが理由です。
2. 上に述べたように自分の専攻分野を研究している上で遭遇したというのが正直なところですが。自分の研究領域におけるジェンダーという視角の意義については難しい問題です。というのも様々な場面で関わってくるという側面が強く、私自身はこうした視角から問題を整理し直してみるという作業はしたことはありません。ただ、専門とする奢侈論において、贅沢＝女性＝柔弱さ＝雄々しく簡素な習俗の衰退＝モラルの退廃といった図式が長く続いたことには興味を持っています。
3. 無理に連携科目らしくするという意識はありません。自分の講義プランの中に、ジェンダーという視点から見ても興味を引きそうな回が含まれているということが前提です。

### ◆ 言語社会研究科

中井亜佐子先生

#### 【社会科学の中のジェンダー／地域文化論(イギリスⅡ)／欧米言語文化論(英語圏Ⅲ)】

1. 言語社会研究科には女子学生が多いのにジェンダー研究の専門家がいませんが、ジェンダー関連の内容を扱う授業は必要だと思ひ、私自身勉強させていたかどうかという意味もあって、エントリーしました。このような学部、研究科横断的な教育プロジェクトは(とくに小さな研究科に所属する者としては)非常に有意義なものだと思います。
2. 私の領域は英語文学、ポストコロニアル研究ですが、「ポストコロニアル」という問題設定をする際に、ジェンダーや階級といった変数を考慮しないわけには行きません。今は、英国のムスリム女性の問題に関心を持っています。一橋の男子学生は、植民地問題、移民問題、人種差別、などの「大きな」テーマには関心を示すのですが、そこにジェンダーを絡ませると、とたんにしらけてしまうようですが。
3. とくに苦勞があったわけではありませんが、上に書いたとおり、英国の移民問題を取り上げると、学生の中には「これは人種・宗教の問題であって、ジェンダーの問題ではない」と感想に書いてきたりするので、うちの大学ではジェンダーは最大の鬼門かしら、と思ったりします。

### ◆ 大学教育開発センター

#### 松塚ゆかり先生【教育と経済Ⅰ／教育と経済Ⅱ】

1. 私の担当する授業では、ジェンダーに関する知識と理解を深めることにより、授業内

容を発展的に理解することができます。ジェンダーは「取り上げるべき問題」というよりも、教育活動を行うにおいて、ある程度の理解を前提とすべきであると考えており、それを可能とする「ジェンダー教育プログラム」にエントリしました。またジェンダーにより深い関心をもった学生が、系統立てて学ぶことができることも考慮しています。

2. ジェンダーについてはごく自然に意識し、継続的に考えてきた、また考えざるを得ない問題です。ジェンダーによる社会的・経済的な「扱われ方」の違いは私の研究領域において不可欠ともいえる検討事項です。

3. 講義の組み立てなどで苦労したことは特にありません。一点コメントとして、1年前はグループ課題でジェンダーを扱うことに躊躇する学生が見られたのが、今年は積極的にジェンダーを研究テーマに選ぶ学生が見られました。一概には言えませんが、問題意識を持つ学生が増えているのかも知れません。



## 第七章

ジェンダー社会科学研究所センター  
(CGraSS) の活動

華力康

トクハチ製薬株式会社 青森工場

青森県 (014-224100)

## 第七章 ジェンダー社会科学研究センター (CGraSS) の活動

### ー 先端課題研究 7 「日常実践／方法としてのジェンダー」

先端課題研究 7 「日常実践／方法としてのジェンダー」は、本研究科のセンター・スタッフおよび大学院生が、各自の社会学・歴史学・人類学・思想／哲学、文学などの専門領域をこえて、3年間にわたり共同研究を行ったものである。人文・社会科学におけるデザインとして、ジェンダー視角の新たな研究の可能性を切り拓き、日常空間のなかで作動するジェンダーに関わる諸問題（労働・家族・身体／生命・アイデンティティ・権力・政治社会秩序・市民社会・公共性・国際関係など）をいかに可視化・対象化し、研究として立ち上げていくことができるかが追究された。

### ◆2007年度

4月25日	初回ガイダンス
5月30日	駒川智子「女性事務職のキャリア形成と『女性活用』—戦後から現代の都市銀行を対象に」
	中野聡「『明治女学校』像を考える」
6月8日	山根純佳「性別分業論の再構成—なぜ女性がケア労働者になるのか」
	荻野美穂（ゲスト講師）「ジェンダー概念と身体の歴史」
7月7日	スピヴァク講演会
10月3日	佐藤文香「自衛隊の女性研究から軍事化のジェンダー研究へ—研究のコンテクストと研究者のポジョナリティ再考」
11月7日	石井美保「子宮を盗む女—ガーナ南部の母系制社会における親族・土地・ジェンダー」
	伊藤るり「再生産労働の国際移転と越境するジェンダー・ポリテイクス—香港の事例から」
12月5日	小井土彰宏「ネオ・リベラリズム/新保守主義の潮流の中での越境空間とジェンダー」
	尾崎正峰「オーストラリアのスポーツにおけるジェンダー視点の試み」
1月9日	坂なつこ「アイルランドにおける女性とスポーツ」
	多田治「沖縄イメージとジェンダー」
	足羽興志子「政治化を拒むものについて：母、ネイティブ、文化人類学」

◆2008年度

4月11日	初回ガイダンス
5月21日	鈴木周太郎「建国期における女性教育の思想—フイラデルフィアのヤング・レディズ・アカデミーを中心に—」
	森田麻美「20世紀転換期アメリカにおける『白人奴隸制』」
	松村美穂「『兵士』の作られ方」
6月18日	嶽本新奈「分断される『性』—愛国婦人会と『婦女新聞』の対立が意味するもの—」
	荒木和華子「米国19世紀奴隸解放期における解放民教育とジェンダー・人種編成」
	松尾奈々「女性に対する暴力—Feminist Self-Defense という抵抗—」
7月16日	中村江里「日本陸軍における『男性性』の再構築—戦争神経症を事例にして—」
	秋山飛鳥「男性稼ぎ手イデオロギーをベースとした企業社会の再検討—日本企業的女性総合職の事例—」
	小野百合子「『差異』と『連帯』をめぐる—」
	後藤千織「離婚・家族扶養裁判に見る支配的ジェンダー・家族観とその脱文脈化—1920年前後の南カリフォルニアの事例を中心に—」
	権慈玉「韓国の近代化と農村女性—1960、70年代を中心に—」
10月15日	洪郁如「植民地研究とジェンダー—台湾を中心に—」
	赤石憲昭「ジェンダー研究におけるヘーゲル哲学—ジュデイス・バトラーを中心に—」
11月19日	佐藤文香「ポストモダンの軍隊とジェンダー」
	坂なつこ「EUにおけるスポーツとジェンダー—アイルランドにおけるEUのインパクトを中心に—」
	浦田三沙子「韓国の女性学：その展開過程と課題」
12月17日	中野聡「LGBT権利運動の市民権戦略とアメリカの政党政治」
	黄綿史「戦前期日本における『女性同性愛』言説の登場—女工と女学生の比較を通して—」
1月21日	上村陽子「1980年代の中国における広告メディアとジェンダー表象分析—日本のジェンダー・イデオロギーの流通と再生産をめぐる—考察—」
	井川ちとせ「新興階級としての事務職員」
1月21日	秋山飛鳥「男性稼ぎ手イデオロギーをベースとした企業社会の再検討—日本企業的女性総合職の事例—」



## 二 公開レクチャー・シリーズ

ジェンダー研究の新しい方法を模索し、社会科学の手法との融合をいかにして果たすのか。この課題にこたえるため、CGrass では、学外からさまざまな研究領域の専門家のゲスト報告者を招いて、公開レクチャー・シリーズを展開している。2007年度から2008年度にかけて、計6回の公開レクチャーが行われた。以下はその記録である。

(1) 公開レクチャー・シリーズ 第1回 (2007年11月28日)

### 「オーラル・ヒストリーとジェンダー研究

—イギリスにおけるオーラル・ヒストリーの展開を振り返って—

講師：酒井順子 (成蹊大学ほか非常勤講師)

文献史料には現れない歴史の諸相を、聞き取りによって再構成するオーラル・ヒストリーの方法と成果。この方法を、いかにしてジェンダー研究に組み込み、新しい研究の可能性を切り拓くことができるのか。ポール・トンズソン著『記憶から歴史へ—オーラル・ヒストリーの世界』の訳者としても知られる、オーラル・ヒストリアンの酒井順子さんに、ジェンダー研究へのオーラル・ヒストリーの手法の導入について語っていただいた。司会は、一橋大学大学院社会学研究科の濱谷正晴先生であった。

### ◆参加記

CGrass の第一回公開レクチャー・シリーズ「オーラル・ヒストリーとジェンダー研究—イギリスにおけるオーラル・ヒストリーの展開を振り返って」は、ポール・トンズソン著『記憶から歴史へ—オーラル・ヒストリーの世界』の訳者で、オーラル・ヒストリアンの酒井順子先生をお招きしました。ポール・トンズソンの本は、濱谷先生の大学院ゼミで最初にテキストとして使用した思い出ある一冊でもあり、講演当時、私は日本仏教の抱える性差別問題を僧侶の配偶者たちへの聞き取りなどから描き出そうと収集したインタビュー・データを整理し、それを修士論文としてどう纏め上げようと悩んでいる最中でしたので、訳者である酒井順子先生のお話を聞くのを非常に楽しみにしておりました。

以下、講演の簡単な内容と、質疑応答での様子を記したいと思います。

オーラル・ヒストリーとは何か。それは、研究法、研究領域、民衆の歴史運動など、様々な領域にまたがって広がっていくもので、人間を軸に展開するヒューマン・サイエンスであると、酒井先生は言います。その研究法は、周辺領域のいくつかの研究法と組み合わせられてつかわれ、本質的に学際的でもあります。しかしこの研究方法としてのオーラル・ヒストリーをめぐるっては、「理論化されていない」との批判を受けることもありますが、トンズソンは『口述の歴史』の第4章において、口述資料の信頼性を以下のように説明して

おります。すなわち、文書資料および統計資料と口述資料は相互に入り組んでおり、文書・統計資料にもバイヤスや誤謬がある。また、口述資料は文書資料を残し難い人々の声、社会から隠されていた側面に光を当てることができる、と。口述の史資料は、文書・統計資料の下位に位置づけられるのではなく、対等に相互に参照・分析され得るべきであると。

また、イギリスにおけるオーラル・ヒストリーの展開を、酒井先生は *More history/Anti-history/How history/Public history* の4つにわけて考察されました。そのうち *More history* は文書記録を残し難かった女性や労働者層の埋没した歴史を救い出し、*Anti-history* は口述の史資料から既存の定説を覆す力を持ち、トンプソンもここがオーラル・ヒストリーの醍醐味であると指摘しています。

講演では、酒井先生ご自身の研究内容や調査経験についても紹介がありました。何よりも驚いたのは、100人もの人にインタビューを行ったというご経験です。ジェンダー化されていた在英日系金融コミュニティの研究において、何人も人の話を聞き、そこから、ジェンダー・アイデンティティとエスニック・アイデンティティが交差されながら形成される様に迫ったことを、ご自身の体験や当時思ったことなどを織り交ぜながらお話ししていただきました。この中で印象深かったのは「オーラル・ヒストリーをやる人は内気な人が多い」という一言です。会場は大爆笑に巻き込まれましたが、しかし、オーラル・ヒストリアンは人の人生を聞き、それに寄り添って研究を進めていきます。我が強くては、その人生に静かに耳を傾けることも難しいかもしれません。普通の人間のフリをして、一対一で聞く、また大事なことは、語り手を対象化しない緊張関係を保ちつつ話を聞く、このようにインタビューを重ねてきたという酒井先生のお話は、オーラル・ヒストリアン見習いとして学ばせていただくことがたいへん多かったです。

質疑応答でもオーラル・ヒストリーの手法、インタビュー・データの整理の仕方、フィールドバックや調査倫理の問題、フェミニスト的アプローチの問題など、白熱した議論が展開されましたが、その全てを書くことは難しいので、強く印象にのこっているお話と、そこから考えたことを簡単に書かせていただきます。

酒井先生がインタビューの聴き取りにこだわるのは、そこには人々の主観が入り組んでいて、その主観の向こう側に見えるものを探しているから、というお話がありました。私も修士論文執筆にあたり、女性仏教徒たちにインタビューを何度も繰り返し返したのは、教義経典解釈のような宗教集団内の上意下達的な理解からではなく、宗教活動の現場での女性たちの生きた声から彼女たちの仏教観の理解を試みる必要性を感じたからです。宗教的エリート層のみ独占された教義に偏重した議論に拘泥するばかりでは、活き活きとした日々の宗教生活に迫れないどころか、そこから排除されていた女性たちの声が無化されてしまうのではないか。その彼女たちのことばから、ダイナミックな「フェミニスト仏教」の萌芽に迫れないだろうか。そのような想いから女性仏教徒たちの声そのものに接近すべくインタビューを重ねていた当時の私にとって、酒井先生のお話は勇気付けられるような思いでした。

私がオーラル・ヒストリーの調査研究手法に惹かれるのは、やはり「人の話を聞く」という人間の営みからそれまで看過されてきた豊かなリアリティに接近する面白さに魅了されているからに他なりません。優れた宗教的感性を持ちながらもマージナルな存在として追いやられていた仏教女性たちの話を聞くと、その面白さと力強さに圧倒され、夢中になりインタビューを重ねてきました。

私の手元にある『記憶から歴史へ』は、付箋や挿まれたメモで膨らんでしまっています。自分自身のインタビュー調査の計画と実施に関しては何度も読み返し参考としておりました。酒井先生の講演に参加できた幸運に、心から感謝しております。

安達 宣子（一橋大学大学院社会学研究科・修士課程）

## （2）公開レクチャー・シリーズ 第2回（2008年1月25日）

「フェールブックの『ジェンダー化』をめぐってージェンダー人類学の視点から」

講師：中谷文美さん（岡山大学社会文化科学研究科・准教授）

バリ島の女性たちの「仕事」の日常を活写した『女の仕事』のエスノグラフィ・バリ島の布・儀礼・ジェンダー』（2003）のお仕事で知られる社会人類学者の中谷文美さんに、フェールブックの手法について語っていただいた。また、编者として『ジェンダー人類学を読む』（2007）を刊行し、地域編・テーマ編としてその研究蓄積を整理した立場から、ジェンダー人類学の可能性とその展望についてもお話いただいた。司会は、一橋大学大学院社会学研究科の石井美保先生であった。

### ◆参加記

本講演において中谷文美先生が問題にするのは、フェールブックの「ジェンダー化」である。フェールブックの実践の中で、「ジェンダー」という差異が重要であるのは何故だろうか。中谷先生は、本講演において、文化人類学における研究者と対象者との関係性や他者概念を整理しながら、「ジェンダー」という差異を見つめることによって、フェールブックやエスノグラフィを再考する。

中谷先生は、フェールブックの実践において、「ジェンダー」の視点は、「ただのトピック」であるのかという、根元的な問題から本講演をはじめ。中谷先生が問題にするのは、「調査者は誰であるのか、そうして、フェールブックにおいて、どんな人であると受け止められているのか」という点である。調査者が男性なのか女性なのかという区別だけではなく、年齢やセクシュアリティ、階級や国籍など、調査者が「誰」であるのかという点と、「ジェンダー」というトピックを扱うことは切り離して考えることはできないと述べる。

「ジェンダー」という視点は、フィールドワーカーがインフォーマントとの関係を築く上で重要であり、データの性質やエスノグラフィにすら影響を与える。調査者は、自由にジェンダーを選べず、当該社会のコードに沿ってジェンダーを規定されている。しかし、ジェンダーは固定的なものではなく、フィールドでどのように振る舞うかによって、対象者との関係性を規定していくような実践なのである。

では、フィールドワークを重ねて描くエスノグラフィに、ジェンダーという差異はどのように影響するのだろうか。

フエミニスト・エスノグラファーは、「一方的・搾取的な関係ではなく、対等で相互信頼に基づいた互恵的な関係を重視する調査と記述」をすることを目指しているという。しかし、女性だから男性に見えないものを描きうるといような、本質的な属性に還元してフエミニスト・エスノグラファーを定義することは、ともすれば、女性を本質化し、女性の内部の差異を消し去ることに繋がるだろう。中谷先生はそれに対して、チャンドラ・モハンテイの、「ロモン・ダイアラレンス（共通の差異）」という概念を参照し、フエミニスト・エスノグラファーは、単に女性同士の感情移入によって成り立たたものではなく、問う必要があるのは、何が共通していて、何が違っているのかであり、違いを見えなくしているのは何か、それでも共通していることは何かという問いであると述べる。

中谷先生が繰り返すのは、自己と他者の関係性をどのように捉えるかという関係性への問いであるといえるだろう。女性や男性といった抽象的な概念ではなく、個別具体的な顔を持った調査者と対象者とが出会うフィールドにおいて、絶えず関係性を切り結びながら調査し描くエスノグラファーは、ジェンダーという差異をなおざりにしてはおけないような繊細さを必要とするだろう。その際、中谷先生は、フエミニスト・エスノグラファーへの疑義として二人の研究者を取り上げる。ジュデイス・ステイシーは、「研究者と対象者との間の親密性によって対象者を搾取」することは「二重の背信行為」であると述べ、L.アブー・エルゴドは、「自己と他者の連続性を強調することで相互理解を追求するべきではない」と述べる。二人の研究者は、研究者と対象者の差異よりも同質性を重視する方法への疑義を突きつけているのである。しかし、エンパワーマントを重視するE,エンスリンの実践に触れ、調査地の人々に対する政治的な応答責任を考慮しながらフエミニスト・エスノグラファーを実践することについても触れる。

これまでの文化人類学研究が、男性偏向であり、男性中心的な産物であったならば、「中立な視点」は、もしかしたら、「男性の視点」の別名であるかもしれない。ジェンダー人類学が思い描くのは、「女性の視点」を取り入れることのみならず、漠然とした男性/女性性といった固定的なジェンダーを再度、フィールドワークとエスノグラフィの実践から問うてゆくような試みだろう。それならば、ジェンダー人類学の試みは、逆説的ではあるが、差異の総体として、フィールドを包括的に理解するための足がかりになるのではないだろうか。

(3) 公開レクチャー・シリーズ 第3回 (2008年6月13日)

「領域分離とジェンダー史研究」

講師：姫岡とし子さん (筑波大学人文社会科学研究所・教授)

ドイツを中心とするジェンダー史研究を切り拓いてこられた姫岡としさんは、『ジェンダー化する社会—労働とアイデンティティの日独比較史』(2004)では、労働の場でジェンダーの差異化と領域分離が構築される姿を日独比較のかたちで提示された。最近ではさらに、ジェンダーの本質的違いを基礎にして、ネイションのなかに女性の居場所とアイデンティティを求める右派の運動に興味をもたれている。双方の領域をまたがる領域分離について縦横に語っていただいた。司会は、一橋大学院社会学研究所の坂元ひろ子先生であった。

◆参加記

本講演では「領域分離」というキーワードをもとに、ジェンダーの壁を越えるべきという問題提起がなされた。姫岡氏はドイツを中心とするジェンダー史研究者であり、『ジェンダー化する社会—労働とアイデンティティの日独比較史』(2004)では、労働の場でジェンダーの差異化と領域分離が構築される姿を日独比較のかたちで提示している。こうした内容に加え、本講演ではジェンダーを基礎に、ネイションのなかに女性の存在意義を求める右派運動について語られた。

まずは姫岡氏がこうした問題意識にたどりつくまでの経歴談から講演が始まった。姫岡氏が研究を始めたのはフェミニズム運動が盛んな頃である。氏は市民的女性運動穏健派と称されたボイラーに注目し、ドイツではじめての内務参事官というエリートである彼女がなぜ「女性の使命は母性」と主張したのか、母性にこめられた意味を考え始める。そこで領域分離を基礎に、女性の社会進出、女性にしか出来ない仕事へ焦点が当てられているのではないかと考えたという。

そこで氏は女性労働を論点とし、就業労働だけを切り離さず私領域も労働に関連することの重要性を感じる。また女性労働を男性中心の労働史の補充とするのではなく、男性＝一般女性＝特殊という一般史の書き直しの必要性に取り組むようになる。たとえば、同じ労働を異なるジェンダーが担うとき、その労働にはどのような意味が付与されるのか。その疑問にこたえるため、氏は繊維工業織物業に関してのドイツ・日本の比較に着手した。

世紀転換期ドイツの繊維工業織物業は男性職工が手織、技能、職人、有資格者として扱われているのに対し、女工は逆に力織維、機械織り、補助労働力、無資格として存在した。いつぼう、同時期の日本においてはやや趣が異なる。日本の繊維工業織物業では男性が手工業職人、技巧、強健で親方とされていたのが、女性の場合は一家の稼が担う未発達な技術者であり、微弱な労働力としてとらえられていた。氏はここに労働のジェンダー化を発見し、本質的にとらえられることもある労働の中のジェンダーが、地域によって異なるこ

とを指摘した。

こうした労働のジェンダー化をさらに深く分析するため、氏は近代的な意味での女性労働者/男性労働者の差を明確にする女性保護法の制定に注目する。女性のみを保護し、女性＝脆弱、意志薄弱、家庭中心、家政教育が本分だとする女性保護法は、男女両者の差異化をはかり強化するものである。こうした差異化により、行政や雇用者から女性は二流の労働者とみなされてゆく。氏はこれらの分析をとおし、しだいに言語を現実の反映ではなく、現実を作り出すものにとらえるようになったという。つまり歴史資料を実体の反映としてではなく、テクストとして読む必要があるということだ。かつ実態調査においてもどのような問題設定によって調査をするのか「現実」の構築を考えるようになったのである。

こうした研究成果を出したのち、2000年以降はバックグラッシュを契機として、姫岡氏はナショナルリズムとジェンダーにも関心を抱き始める。姫岡氏はネイションの中でジェンダーによる居場所の違いと相互補完が行われていると指摘する。その例として、時代はさかのぼるが、ナポレオン戦争期のドイツにおけるジェンダーによる労働分担が補完的に機能した例を挙げた。ここでは女性がネイションのために社会活動を行うことが許され始め、領域分離にのっとった活動が行われた。男性は破壊、殺戮、先頭、征服、国家形成として語られ、女性は再建、治療、出産、維持、民族形成を担った。そして男女の愛と補完性が、ネイションの強化のためにいかに重要かが強調された。ここではまさにジェンダーの構築・強化は言説によってもたらされている。この例を見ても、必ずしも一定ではない体験・行為から生まれるジェンダーを考え、領域分離というキーワードをもとにジェンダーの壁を越える必要性をさらに感じるようになったという。

これら特筆すべき研究成果に留まらず、現在の問題意識につながるご自身の大学院生時代のご経験もふまえ、本講演ではより長いスパンでの問題意識が語られた。研究成果だけではなく、氏の研究生生活の中で通底する問題意識や、大学院生時代の着眼点についても聞くことができたことは参加者にとっては非常に有益な機会であった。姫岡氏の「労働のジェンダー化」―世紀転換期のドイツでは繊維業の職工は主に男性が担い手であり、専門職とみなされていた―という指摘は、現在の女性労働を考える上でも非常に貴重な発見であるといえよう。歴史研究の中で様々な分野での「ジェンダー化」の過程を明らかにする試みは、固定的なジェンダー規範を覆すものとなる。姫岡氏の研究に学び、歴史研究の分野でジェンダーそのものの再考を行うことは、ジェンダー研究の深化に寄与するのではないだろうか。

黄綿 史 (一橋大学大学院社会学研究科・博士課程)

(4) 公開レクチャー・シリーズ 第4回 (2008年11月29日)

「フェミニズムとリベラリズムの拮抗——新しい<家族>の可能性」

講師：岡野八代さん (立命館大学法学部・教授)

政治思想史をご専門とされる岡野八代さんは、そこにフェミニズム理論を接合し、政治思想／理論における「家族」の問題について重要な議論を展開されてきた。政治理論における「家族」を論じることで「政治的なるもの」の再検討を試みる岡野さんに、これまで二項対立的にとらえられてきた「家族と政治」の関係について語っていただいた。司会は、一橋大学院社会学研究科の平子友長先生であった。

◆参加記

公開レクチャー・シリーズ第4回は、岡野八代さん (立命館大学) を講師にお迎えして、2008年11月28日に行われた。報告の題目は「政治『学』批判としてのフェミニズム—フェミニズム理論からの社会構想の可能性を問う」、報告・質疑応答は2時間半におよび、活発な議論が交わされる有意義な会となった(以下、本稿内の「」は報告レジュメおよび口頭での発表からの引用であり、『』はレジュメ内で「」に括られていた部分である。また、〈家族〉の〈 〉はレジュメに従って付けたものである)。全体のテーマとされた、近代的な主体に対する批判やケアの倫理をめぐる熟考、社会的なるものの理論化、家族や社会の(再)構想などは、フェミニストの研究者に限らず、社会科学のいくつもの分野でいま喫緊の課題として関心を共有されている問題群であると思われるが、それらを岡野さんのご専門である政治思想からアプローチする試みをうかがうことができた。それと同時に、これまでに発表された論文や著書、関心をお持ちの運動などへの言及から、研究者としての岡野さんの思想の軌跡のようなものまでぞかせていただいたのは、このレクチャー・シリーズならではの貴重な機会であった。

報告は、岡野さんの近年のご研究の大きな構想を支える三つのステップを意識しながら進められた——1) 伝統的なリベラリズムにおける理想の市民像の批判、2) 家族とケアの倫理への注目、3) フェミニズム理論からの非・暴力的で自由な社会構想へ、である。なかでも中心に据えられたのは、2) の家族とケアの倫理をめぐる理論展開であった。ここでは字数の都合上、報告のまとめに1) ～3) の分類をお借りしつつ、質疑応答も含めた全体の内容を概観し、最後に私見を述べることにしたい。

1) 伝統的なリベラリズムは、自立した「自由な主体」や(自己)「責任ある市民」を前提にしており、また、個人の自由や愛の領域として私的・家内的な領域(家族や家庭)を囲い込んできた。この枠組みに対して岡野さんは、市民や国民への包摂過程や人びとの主体化の過程においてこそ、個々の生きられた経験や多様な生の構想が剥き落とされる暴力がはたらくのではないかと疑問を呈し、さらに、リベラリズムが、子ども時代を生き延びるための依存も含む依存する他者というものと、その他者への応答責任・ケアについて

はほとんど語ってこなかったことを指摘された——ケアは政治的な領域の外部にあるものとされ、歴史的に周辺化されて「ジェンダー支配」のみなもとになってきたのである。

2) ゆえに家族とケアの問題は、政治思想が顧みてこなかっただけでなく、フェミニズムの理論にとってはどのような論じられるかが複雑で論争的だったものである。そこで岡野さんが注目するのは、家族の機能——多様な人びとや異なる時間性を「出会わせる場を提供する」機能や、「社会的弱者、公的な存在としては認められない者たちのケア」の機能——の再考である。それによれば、家に暮らすことは、ケアされる者にとって自分を受容され解放される場所を得ることであり、ケアする者にとっては、(生まれてくる・養子に迎える子どものように) 予め知ることのできない「『非決定の他者』」を受容し、そのニーズに応答して保護する場を作り続けることである。したがってこのような「依存と相互承認」による他者同士の平和な共存が日々実践される(家族)こそ、まさに「社会的な」場なのである。少し言い方を変えれば、家族とケアの場は、ケアする者とされる者との多面的な非対称関係ゆえに、愛や共感だけでなく暴力の可能性をも潜めさせている。しかし、だからこそ倫理と責任が要請され、支配的にも暴力的にもならないかたちでの対話や同居や接触が重ねられ得る場なのであり、そのような(家族)は「公共のもの」・「開かれたもの」・「社会的なもの」として示されるのである。

3) では、「なぜ(家族)から出発することが国家権力に対抗することになるのか」。これは報告の最後に今後の展開として改めて述べられた問いである。そこで示唆されたのは、開かれた家族を社会的なものとして捉え直す試みが、「国力や国史、国益の人質となってきた『家族』を取り戻す」ことにつながること、また、ケアの倫理が含意する非暴力と自由で平等な共存は、国家の戦争や武力衝突を回避することや、暴力が起こってしまった後の傷ついた人びとへのケアへとつながっていくべきものであるということであった。

続く質疑応答では、より大きな・異なる視座から報告の位置づけが確認されるという運びになった。このことは、上のように岡野さんが取り組まれている家族とケアの理論化の緊急性と重要性を示唆していたと思われる。主要な話題を三つ挙げると、第一には、岡野さんの報告も含むケアをめぐる今日的な議論と、1970年代以降のフェミニズム理論とのより詳細な関係である(たとえばなぜ「家族」なのか、母性や母子関係をいかに再考するものかといった問い)。第二に、今日のグローバル化やケアをめぐる社会の動きを考慮するものである(たとえば、トランスナショナルな契約も含めケア労働の女性化や人種化が進むとともに、家庭や病院などケアの現場での暴力が止まないなかで、ケアの価値や愛といった論理を国家権力の側も用いていることへの懸念)。第三には、ホームとケアの再考における愛や希望の語り直し・非暴力の試み・倫理の要請などに関して、学問という領域がどこまでアプローチできるのかという、学知の存在論的な問いともいえるものである。

これらはもちろん報告を受けた参加者全員にとっても課題であるが、岡野さんご自身も多くの回答をされた。母性や母なるものに関しては、養育者という役割や家事の価値の読



み替え、自然と「本質主義」をめぐる議論の見直しの必要などが指摘され、家族という言葉はさらに説明された——それは、ともに生活する人びと・住居・家事から、人びとの想いや心のなかにもある故郷、人びとと生活の記憶や語りなどを広く含意する「ホーム」であり、物質的なものと抽象的なものをつなぎ、横の（同時代の）つながりと縦のつながり（世代や歴史）の両方に開かれたものである。そこで家族の語に賭けられているのは、これまで価値を貶められてきた（あえて言えば女性化されてきた）領域や言説化されずにきたものの回復であり、支配的なものを批判するとともに異なる視座をも提示するフェミニズムの創造的な可能性であるという（岡野さんの回答のなかで、ケアギバターの社会的地位の向上および手厚い経済的保障の必要性への言及がなされたが、これはフェミニズムの社会構想のなかで国家との交渉ごとに含まれると言えるだろう）。

国籍や生活の場所やこころの在り処などのいくつものホーム。生物学的なつながりや血縁によるとは限らず、また、セクシュアリティやロマンスが必須なわけでもなく、友愛や意思や必要、偶然などによっても結ばれる人びとの関係性。そこで未知なる他者を受け容れること、同化や完全な理解を自明視しないこと、非対称であっても支配的でなく暴力的でもない関係をはぐくむこと——岡野さんが家族とケアという表現で議論されたこれらの問題は、国民と移民と難民の関係や、（代理母を含む）母の身体を場にした母と子の関係などにも共有され得ると思われる。つまり国家なるものの（再）構想や語り直し、ひととその身体や生の捉え直しである。また、これらの背景には、まさにこれまでフェミニズム理論が批判してきた近代的な主体や、家長制的な家族とジェンダーの役割分業などを、具体的な歴史として可能にしてきた社会的・経済的な条件がある。ここでは、従来のジェンダーや人種、階級といったものもまたトランスナショナルに、そして植民地と帝国の複数の歴史を呼び起こしながら組み替えられてきている。したがって岡野さんの報告で示されたホームとケアの議論と私たちそれぞれの応答には、フェミニズムの歴史化や継承の方法、学知なるものごの責任や自由の（再）構想も賭けられているだろう。

松村 美穂（一橋大学大学院社会学研究科・博士課程）

(5) 公開レクチャー・シリーズ 第5回 (2008年12月19日)

「“ホモエロテイズム”とポストコロニアル沖縄の関係」

講師：新城郁夫さん（琉球大学法文学部・准教授）

新城郁夫さんは、日本近現代文学、とりわけ沖縄文学、沖縄を扱った文学作品を、ジェンダー概念を積極的に導入しながら読み解いてこられた。同時に、沖縄のおかれている状況、沖縄についてのさまざまな表象に対しても、鋭い批判のメスを入れておられる。“ホモエロテイズム”をキーワードに、沖縄をめぐるポストコロニアルな状況／表象について語っていただいた。司会は、一橋大学大学院言語社会研究科の鵜飼哲先生であった。

#### ◆参加記

第 5 回の公開レクチャーは琉球大学の新城郁夫氏を講師に招いて行われた。新城氏は、現代沖縄文学を論じさせたら右に出るものはない批評家であり、研究者である。その鋭く豊かなテクニストの読解によって、沖縄文学の読解可能性は、その都度、更新されてきた。具体的には沖縄文学を出発点として現代思想との豊かな対話をしつつ、他の研究領域との橋を架ける仕事をされてきた。とくにジェンダーとセクシュアリティの問題系は初期の仕事から問われ続けており、豊かな関係がきり開かれてきたといえるだろう。今回の報告はその延長にある。以下の参加記では新城氏の報告の要旨を中心に、最後にごく簡単な感想を述べたい。

まず新城氏は問題意識として、テレビや映画など沖縄のメディア表象には含まれている政治性への言及からはじめた。「沖縄」という表象は、さまざまなメディアによって女性ジェンダー化されて語られることがある。この語りの欲望の根底には集団自決や米軍基地の問題ともかかわる政治的暴力が潜在していることが指摘でき、現在の「沖縄」が置かれているポストコロニアルな政治状況を透かして読むことができる。そして、その有効性は認めなければならないとも語った。

だが他方で、この表象と政治の問題は、女性ジェンダーの動員だけではとらえきれないのではないのか、沖縄の女性ジェンダー化は、むしろ歴史的なスパンをとったとき、より大きくは男性間の欲望の交換、つまり、ホモソーシャルな権力関係を作動させるホモエロティシズムの問題系の内部にあるのではないか、と新城氏は指摘する。こうした観点から、戦後の沖縄を代表する小説家である大城立裕の自伝的小説『朝、上海に立ちつくす 小説「東亜同文書院」』の読解が試みられる。

「東亜同文書院」は 1944 年から敗戦にかけて大城が学んだ実際に存在した大学である。小説では主人公の「沖縄人・知名」、学友である「朝鮮人・金井」「台湾人・梁」「日本人・織田」の民族的な葛藤が、「沖縄人女性・新垣幸子」「中国人女性・范淑英」との関係の中で描かれる。しかし奇妙なのは、男性主体間の精液を授受するという「夢」が執拗なまでに反復されていることである。もちろん、この「夢」を「沖縄人・知名」の青年期特有のアイデンティティの不安と彼の民族的なマイノリティとしての葛藤から生じたものとして考えることは十分可能である。実際に、この小説はどのように論じられてきたし、それは作者が述べてきたことでもある。

しかし、新城氏はこれを作者の意図とは、「さかさまに」読むことを試みたいとする。この「夢」を、精神分析的にそこに「抑圧されたもの」を讀んでいくのである。そこから注目されるのは、第二次世界大戦中の「大東亜」のビジョンが「同文」のカテゴリーで結び付けられた「植民地」の上海で見られた「夢」であるということだ。このとき、男性間の精液の授受という「夢」に抑圧された「大東亜」の理念の象徴としての「血盟の成立」という潜在的な主題系が浮かび上がってくる。

実際の小説では、人物配置において「血盟の中心」に「日本人・織田」が存在しており、

また、「知名」は無意識的なレヴェルで「日本人」である「織田」との近さを何よりも気にしていることがわかる。そして、実は「知名」の「夢」の中には「織田」が隣に控えており、「知名」は彼をこそ欲望の宛先としてしていると読めるのである。そして同時にこの「中心」との近さによって生じる「序列化」の中で、「新垣幸子」「范淑英」など女性の登場人物たちは周縁化されてもいる。新城氏は、ここに明瞭な形でホモエロティシズムと結びついた男性間でなされるホモポリテイクスの構図を見ることができるとする。

さらに興味深いことに敗戦を迎えた「知名」は、その動揺の最中に足を踏み入れた「上海のフランス租界」において「織田」とは違う人物との同性愛セックスを行い、そのことを恥じ、同性愛的欲望を代理的に否認する。このエピソードは以上の脈絡でとらえたときに、単に「若気の至り」といった言葉ではすまない問題が背後にあることがわかる。この恥辱化のメカニズムによってこそホモエロティシズムは否認されるのである。新城氏は、こうした形で小説に見られるホモエロティイクスの動員と否認において「大東亜」という歴史的なビジョンの忘却がなされているのではないかと述べ、この読解を起点に「大東亜」の歴史の再考をしたい、それを夢のように考えているのです、と報告を締めくくった。

続いて質疑応答がなされた。きわめて豊かな質問のやり取りが50分近くなされていたが、発表と同程度に内容が豊かであったため、残念ながらこの参加記では割愛させていた。しかし、小説の「夢」の読解を通じた新城氏の、別の意味で「夢」に満ちた読解は、ジェンダーの領域に限らず、多分野の研究者と学生の発言を喚起し、その場が熱気に包まれていたことは付け加えておく必要がある。おそらく分野は違う参加者のそれぞれの思考の間に橋が架けられ、さらに「夢」を見させる程に、充実した報告だったからだろう。また、おそらくそれは未来になんらかの応答という形で実を結ぶ「夢」でもあるに違いない。

小田 剛（一橋大学大学院言語社会研究科・修士課程）

#### (6) 公開レクチャー・シリーズ 第6回 (2009年1月30日)

##### 「台湾女性の相続権をめぐるジェンダー・ポリテイクス」

講師：陳昭如さん（国立台湾大学法律学院・助理教授）

陳昭如さんは、フェミニズムの視点から台湾における「法の近代化」を研究する新鋭の研究者である。「ジェンダー間の平等」の理念を取り入れた戦後台湾の法律と、伝統的な社会規範との間には大きな乖離が存在した。法律では、娘にも息子と同じく相続権が与えられたが、実際に相続権行使した娘には「不孝」の汚名が背負わされてきた。数々の判例の分析を通じて、女兒相続を抑制するメカニズムを跡づけながら、相続権の「放棄」か「行使」かをめぐる、台湾女性の戦略と主体性の問題が論じられた。司会は、一橋大学大学院法学研究科の王雲海先生であった。

#### ◆参加記

今回の報告の概要について述べる前に、まずは報告者である陳昭如氏の経歴について簡単に紹介しておこう。陳氏は国立台湾大学の法律学院を卒業後、同大学の大学院へと進学、博士課程在学中にアメリカのミシガン大学ロー・スクールへと留学し、当地でフェミニズム法理論などの研究で日本でも令名の高いキャサリン・ワツキンソンの指導の下で法学博士号を取得した後に台湾へと帰国し、現在では国立台湾大学法学系の助理教授を務めている。専門は台湾およびアメリカ合衆国の法制史やフェミニズム法理論、ポストコロニアル法学である。

本報告は、現代の台湾における相続制度をめぐるジェンダー・バイアスの存在を析出した上で、そうしたジェンダー秩序の下での女たちの抵抗の姿を描き出そうとしたものだけといえる。報告の冒頭では、最近、台湾のメディアを賑わせた事件の紹介が行われている。それは亡くなった夫＝父の遺産相続をめぐる、六人の娘たちが妻＝母と二人の息子＝兄弟を刑事告訴したという事件であるが、この事件の背景には、相続法上では男女同権が保障されているにもかかわらず、女子には相続放棄を迫るという社会的抑圧の存在がある。

陳氏はこの抑圧の問題を論じるにあたって、かのじよが「二元論的な認識構造」と呼ぶカテゴリー化の具体的な内容について、「相続を放棄する娘—親孝行・無私—父権的伝統下における犠牲者—遅れた社会・法制度 対 遺産争いをする娘—親不孝・貪欲—父権制に挑戦する行動者—進歩した法制度」と定式化した上で、この定式化を乗り越えるための理論的な試みを行っている。その成果についての詳細な報告は、紙幅の都合で省略せざるをえないが、重要なことは以下の諸点にまとめられよう。

一つめは他家に嫁いだ娘たちをよそ者とみなすという、日本でもみられる典型的で排除的な文化的風習があること。二つめは娘による相続放棄を家族的共同体に対する忠誠心の表れとみなす考え方が根深く残っているということ。三つめは大部分の妻＝娘が親の介護をするという社会的実態があるにもかかわらず、夫＝息子が介護の中心的な担い手となるのであり、したがって、遺産はそうした扶養の義務を担っている息子だけに相続されるべきだ、という考え方もなかなか変わらないということ。四つめは同じ女性ジェンダーに属する者でありながら、母と娘たちとの間でも厄介な対立がみられるが、アメリカの人類学者マーガレット・ヴォルフの「子宮家族」という概念を用いることにより、母による息子を通じた家族の支配という要因の存在を明らかにでき、その結果、こうした対立が生じる理由を説明しうるのだということ。そして最後は、法制度上の「平等」が達成されたはずなのにもかかわらず、社会的な不平等がなおも残存しているのはなぜなのか、という批判的法理論上では馴染み深い問題の存在だけではなく、一見支配的にみえる「構造」への服従を強いられているはずの被支配者たち（今回の報告では女性）がどのようにしてそれに抵抗しているのか、ということである。

残念ながら、当日は時間の関係上、最後の点について詳細に論じられることはなかったが、今後も陳氏の手によってさらに継続されるであろう精緻な判例分析と、フェミニズム

などの社会理論との接合により、われわれが法というものに対して抱いている固定的な観念から解放され、ひいては社会変革への途を切り拓くための契機が与えられることを期待したい。なぜなら、「フェミニズムはみんなのもの」(ペル・フックス) というように、女たちの闘いの成果はわたしたちみなが享受できるはずのものなのだから。

綾部 六郎 (北海道大学大学院法学研究科・博士課程)

### 三 その他の講演会

「性暴力を考えるー『性犯罪被害にあうということ』の著者、小林美佳さんを囲んで」

2008年10月30日、CGraSSは、『性犯罪被害にあうということ』(朝日新聞出版、2008)の著者、小林美佳さんをお招きして講演会を開催した。自らの被害体験を語ることを通じて性暴力被害者支援にも取り組まれている小林さんに、ご著書についてお話しいただき、さまざまな角度から性暴力の問題について議論を行った。この講演会は、性犯罪被害について話を聞くことができる貴重な機会となり、一橋大学のなかでセクシュアル・ハラスメント防止のための活動に関わっている教職員の参加も得て、本学での性暴力問題とその防止策など、現状や課題についても意見交換を行った。司会は、一橋大学大学院社会学研究科の貴堂嘉之先生と佐藤文香先生であった。

#### ◆参加記

2008年10月、ジェンダー社会科学研究センターは、『性犯罪被害にあうということ』の著者である小林美佳さんをお招きした。会場となった教室は、学部生、大学院生、教職員でいっぱいとなった。講演会の時間配分は、始めの40分程が、小林さん自身による、事件が起きた時の状況や、その後の状況、当時の気持ちや、周りの人の反応、現在行っている活動や出版後の生活の変化のお話し、途中、5分程度の小休憩、最後に1時間程、質疑応答の時間が設けられた。

小林さんが伝える事件やその後の状況は、過剰に劇的なものでも、まとまりのある平板なものでもなく、具体的であり、ボコボコしていて、生々しかった。小林さんのお話の中には、印象に残る言葉が幾つかあった。ここでは、その内の2つを報告する。

1つ目は、「理解できないことをわかって欲しい」という言葉である。講演会が始まる前から、小林さんは、「分かって欲しい」というメッセージを発していたように筆者は理解していた。その為、「理解をして欲しい」という言葉であれば、スツと耳に入ってきたかもしれない。しかし、小林さんは、「理解できないことを分かって欲しい」と言った。性被害について、分かったつもりになるのではなく、それぞれの事件から被害者が感じる

ことは、個々に違いがあり、その被害に遭った人以外には、分からないという自覚が大切ということなのだろうか。理解できると思うよりも、理解できないという自覚を持つことによって、初めてその人の事実や思いを<聴く>ことができるのではないか。そして、それが性被害を理解する試みに、少しでも近づぐことになるのではないかと思つた。小林さんは、「分かつて欲しい」からこそ、「理解できないことを分かつて欲しい」という言葉を残したのではないだろうか。

印象に残つた言葉の2つ目は、「完璧な被害者モードに落とす」という言葉である。小林さんは、講演会などの際には、事件当時の自分に戻り、気持ちを落とすという。それは、「大丈夫よ、8年後にはこうなるから」という伝え方では、被害者を救うことができないからと言っていた。筆者は、これを聴いたとき、すぐにはその意味が分からなかった。しかし、この報告書を書いている今は、こう理解している。

事件から8年経つた後の性被害者ではなく、被害にあつた当時の性被害者の感覚や感情を言葉で伝えることに意味がある。それは、当時の小林さんが伝えることによって、被害に遭つた人が、「この人なら理解してくれるかもしれない」「この人には話してみよう」という気持ちになるからではないだろうか。これは、筆者の経験から推測された。筆者は、一橋大学院に所属し女性の抑圧状況と性暴力、それに対する抵抗について研究をしながら、Feminist Self-Defenseのインストラクターをしている。Feminist Self-Defenseとは、暴力の中でも性暴力に焦点を当て、それに対する抵抗の知恵を伝え合い、実践し合いながら、安全を築く方法を学び合うプログラムである。講座では、毎回、性暴力を受けた人の話を耳にする。そして、そこでは<同じ>性被害者の中でも、その経験や感じ方、その後の捉え方は、人によって、状況によって様々であることがうかがえる。しかしながら、ここに集まつた人々は、必ずしも同じではない個別な話を聴く中から「私にも…」という、自分の中のある部分に通じるところ、自分の中のある部分をくすぐるところを感じて、自分の経験を話します。そしてそれを聴いたまた別の人が話したのである。筆者は、このような経験に基づいて、今回の小林さんの「完璧な被害者モードに落とす」という言葉を理解した。さらに、小林さんの性暴力被害者としての話に触れることは、被害に遭つていない人にとつては、「被害者に対して視線を向けるときの入り口(小林美佳, 2008, 『性犯罪被害にあうということ』, 朝日新聞出版. Pp9) 」となるとも思つた。

小林さんは、事件当時、「話を聴いてくれる人、分かつてくれる人に会いたかつた」、だから自分ができる支援とは、被害を受けた人の話し相手になることだという。そして、講演会の間、「みなさんは/みなさんも」と繰り返しながら、被害を受けた人の話し相手になること、被害を受けた際に話し相手になるような人を身近にもつことを伝えていたように思う。

理解できないことを自覚し、性被害に遭つた人の話を<聴く>。被害に遭つたとき、それを話すことができる信頼関係を日頃から築いておく。被害者のことが考えられた性暴力への取り組みは、このように被害者が話すことのできるような環境を身近に作ることなの

ではないだろうか。そして、そういった環境をつくるきっかけとして、事件を受けた8年前の小林美佳さんが語る、今回の講演会があったのだろう。

最後に、事件の時、小林さんは、「ただ、生きたい。死にたくない。」と思ったという。事件直後、「誰かに話さなきゃ」と思ったという。私は、ここに小林さんの＜生き抜く力＞を感じた。現在、小林さんは講演会や雑誌、テレビへの出演などの活動を行っている。小林さんは、自分に起こった事件は「当たり前前の記憶」として捉えているが、「その記憶を呼び起こすこと」「そこにもう一度自分の身をおくことは辛い」と言っていた。今回、そういった思いをしながらも伝えてくださった事件のこと、事件後のことによって、筆者は、今一度、『性犯罪被害にあうということ』を考えた。

松尾 奈々（一橋大学大学院社会学研究科・博士課程）

四 CGrASS 活動日誌 (2007—2008 年度)

(1) 2007 年度

2007 年 4 月	2、4 日	2007 年度 GenEP リーフレット配布
2007 年 5 月	23 日	第 1 回 GenEP ミーティング
	25 日	読売新聞・立川支局記者との広報打ち合わせ (木本喜美子)
2007 年 6 月	30 日	先端研授業 (山根純佳報告)
	8 日	キャリアデザイン打ち合わせ (福岡美佐子、木本、秋山飛鳥)
2007 年 7 月	〃	先端課題研究：ゲスト講師、荻野美穂氏
	20 日	第 2 回 GenEP ミーティング
	26 日	連合・総合人権・男女平等局長・片岡千鶴子氏 (木本、貴堂)
	2 日～	GenEP 授業アンケート
	5 日	東北大学ジェンダー法・政策研究センター研究員・犬塚典子氏によるインタビュー (木本喜美子、貴堂嘉之)
2007 年 8 月	7 日	スピダーク講演会
	12 日	「社会科学のなかのジェンダー」受講生の総括ミーティング (貴堂、木本、佐藤文香、多田治)
	13 日	第 3 回 GenEP ミーティング
	17 日	如水会寄付講義にて「キャリアデザイン」の宣伝チラシ配布
	24 日	「HQ」のセンター取材 (貴堂)
2007 年 9 月	3 日	東北大辻村みよ子氏との打ち合わせ (木本、貴堂)
	〃	読売新聞記者の取材 (木本、貴堂)
	10 日	第 4 回 GenEP ミーティング
	18 日	杉山学長との面談 (木本、貴堂)
	〃	伊藤先生、小井土先生との打ち合わせ
2007 年 10 月	3 日	先端研授業 (佐藤文香、石井美保報告)
	4 日	「男女共同参画時代のキャリアデザイン」授業開始
	5、12 日	木本ゼミ、男性史ワークショップ向けに公開
	18 日	センター・リーフレット納品 (600 部)
	19-20 日	院生によるワークショップ「男性史の可能性」(加藤千香子氏・海妻径子氏・兼子歩氏)
2007 年 11 月	31 日	第 5 回 GenEP ミーティング
	7 日	先端研授業 (伊藤るり、小井土彰宏報告)
	10 日	各研究科事務室に GenEP アンケートの案内告知



	13日	5 研究科 MLにて GenBP アンケートの案内通知
	28日	第6回 GenBP ミーティング
	〃	公開レクチャー・シリーズ 第1回「オーラル・ヒストリーとジェンダー研究—イギリスにおけるオーラル・ヒストリーの展開を振り返って」講師：酒井順子氏（成蹊大学ほか非常勤講師）
2007年12月	5日	先端研授業（尾崎正峰、坂なつ子報告）
	7-9日	国際シンポジウム「再生産領域のグローバル化とアジア」
	14日	「労働とジェンダー」連合の片岡千鶴子氏による講義
2008年1月	9日	先端研授業（多田治、足羽與志子報告）
	12日	学術会議シンポジウム「人口とジェンダー—少子化対策は可能か」、ジェンダー・センター・ネットワーク会議（貴堂）
	14日	東海ジェンダー研シンポジウム参加（木本、貴堂、小野百合子、中村江里）
	15日	京都大学視察：女性研究者支援センター、男女共同参画企画推進委員会（木本、貴堂、小野、中村）
	23日	大教センター主催 FDシンポジウムの打ち合わせ（大教センター、木本、貴堂）
	25日	第7回 GenBP ミーティング
	〃	公開レクチャー・シリーズ 第2回「フェイェルブロークの『ジェンダー化』をめぐって—ジェンダー人類学の視点から」講師：中谷文美氏（岡山大学社会科学文化科学研究科・専任講師）
2008年2月	1日	大教センター主催 FDシンポジウム（発表：木本）
	6日	JSD（日本サーベイス・流通労働組合連合）との意見交流（木本、ウラノ・エディソン）
2008年3月	10日	ニューカッスル大学ジェンダー研究所所長ダイアン・リチャードソン教授との意見交流（木本）
	11-15日	韓国視察：高麗大学、梨花女子大学、中央大学（中村）
	15-20日	琉球大学視察（小野）

(2) 2008年度

2008年4月	2日	第1回 GenBP ミーティング
2008年5月	21日	先端研授業（鈴木周太郎、森田麻美、松村美穂報告）
2008年6月	11日	第3回公開レクチャーに向けての読書会
	13日	公開レクチャー・シリーズ 第3回「領域分離とジェンダー史研究」講師：姫岡とし子氏（筑波大学人文社会科学研究所・教授）

	18日	先端研授業 (嶽本新奈、荒木和華子、松尾奈々報告)
2008年7月	16日	先端研授業 (秋山飛鳥、小野百合子、後藤千織、権慈玉報告)
	24日	第2回 GenBP ミーティング
	29日	2008年度「キャリアデザイン」の総括会議 (木本)
2008年10月	1日	第3回 GenBP ミーティング
	15日	先端研授業 (赤石憲昭、洪都如報告)
	30日	「性暴力を考えるー『性犯罪被害にあらうということ』の著者、小林美佳さんを囲んで」講師：小林美佳 (みかつきー性暴力被害者自助グループ運営事務局)
2008年11月	8-11日	広島大学視察 (中村)
	10日	名古屋大学：シンポジウム「あいち男女共同参画社会推進・産学官連携フォーラム」への参加 (小野)
	19日	先端研授業 (佐藤文香、坂なつ子、浦田三沙子報告)
	21日	木本ゼミ、第4回公開レクチャーに向けて公開
	28日	「労働とジェンダー」で JSD 労組・竹本氏による講演
	〃	公開レクチャー・シリーズ 第4回「フェミニズムとリベラリズムの拮抗ー新しい<家族>の可能性」講師：岡野八代氏 (立命館大学法学部・教授)
2008年12月	4日	JSD 労組と木本学部ゼミとのジョイントイベント
	13日	大阪府立大学：国際シンポジウム「大学と地域における女性学研究センター役割：現状と課題」への参加 (佐藤雅哉)
	17日	第4回 GenBP ミーティング
	〃	先端研授業 (中野聡、黄綿史、上村陽子報告)
	19日	公開レクチャー・シリーズ 第5回「“ホモエロテイズム”とポストコロニアル沖縄の関係」講師：新城郁夫氏 (琉球大学法学部・准教授)
2009年1月	20日	国際基督教大学 GGS 田中かず子氏との対談 (木本)
	8日	陳先生招聘のための打ち合わせ (木本、小野)
	21日	先端研授業 (井川ちとせ、秋山飛鳥報告)
	30日	公開レクチャー・シリーズ 第6回「台湾女性の相続権をめぐるジェンダー・ポリテクス」講師：陳昭如氏 (国立台湾大学法律学院・助理教授)
2009年2月	2-3日	北海道大学視察 (木本、小野、中村)
	18日	第5回 GenBP ミーティング
2009年3月	11日	第6回 GenBP ミーティング

一橋大学ジェンダー社会科学研究所センター活動報告書  
(2007-2008年度)

2009年3月

発行：一橋大学ジェンダー社会科学研究所センター

一橋大学大学院 社会学研究科

〒186-8601 東京都国立市中2-1-1

<http://gender.soc.hit-u.ac.jp/>

